

一般国道
10号線 行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

金屋遺跡

福岡県行橋市大字金屋所在遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会

金屋遺跡

福岡県行橋市大字金屋所在遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会



金屋遺跡全景



(1) 金屋遺跡 B区 井戸5号(桶井戸)



(2) 金屋遺跡 B区 出土遺物(中世)



(1) 貿易陶磁器・ガラス製品(中世) (上)表
(下)裏



(2) 赤漆片

序

一般国道10号線行橋バイパスは、平成3年8月6日に全線供用が開始されました。

この行橋バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和62年度と平成2年度の2ヶ年に2ヶ所の発掘調査を実施しております。

この報告書は、平成2年4月から7月まで発掘調査を実施しました行橋市大字金屋地区の遺跡について発掘の成果をまとめたものです。

本書を、学問研究に、教育の場に、広く活用いただければ幸甚です。

なお、発掘調査にあたっては、御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝いたします。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

- 1 この報告は、1990年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線行橋バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
- 2 本書は、行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第2集となり完了報告書である。
- 3 遺物の実測は、平田春美・副島邦弘が行ない。挿図・図版作製・製図には、豊福弥生、原カヨ子、水野美奈、土山真弓美と副島が、遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館で実施した。
- 4 遺物写真については、岡紀久夫が、遺構の写真は調査担当の副島が、空中写真は空中写真稲富が実施した。題字は芝真由美氏にお願いした。
- 5 鉄製品の保存科学処理は横田義章氏（九州歴史資料館）があたった。
- 6 本書の執筆・編集は副島が担当した。

本文目次

序	頁
I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織と関係者	2
II. 位置と環境	5
III. 発掘調査の記録	7
1. 発掘調査の概要	7
2. 生活遺構と遺物	7
IV. おわりに	63
1. 金屋遺跡の歴史的背景	63
2. 検出遺構と遺物について	65
3. 総括	70

図 版 目 次

- 冠首図版 1. 金屋遺跡 全景
2. (1) 金屋遺跡 B区 井戸5号 (桶井戸)
(2) 金屋遺跡 B区 出土遺物 (中世)
3. (1) 金屋遺跡 貿易陶磁器・ガラス (中世) 表
(2) 金屋遺跡 貿易陶磁器・ガラス (中世) 裏
(3) 金屋遺跡 赤漆片
- 図 版 1 金屋遺跡周辺俯瞰航空写真
図 版 2 金屋遺跡付近航空写真
図 版 3 金屋遺跡 発掘区全景俯瞰 (空中写真) 北から
図 版 4 (1) 金屋遺跡 発掘調査前 (南から)
(2) 金屋遺跡 表土剥ぎ
(3) 金屋遺跡 発掘風景
図 版 5 金屋遺跡 I-A区遺構全景 (空中写真) 西から
図 版 6 (1) I-A区 全景 (北から)
(2) I-A区 全景 (西から)
図 版 7 (1) I-A区 建物遺構近景 (北から)
(2) I-A区 建物遺構近景
図 版 8 (1) I-A区 胎衣遺構全景
(2) I-A区 胎衣遺構 (蓋をはずした状況)
(3) I-A区 胎衣遺構 (取り上げ後)
図 版 9 (1) I-A区 井戸遺構近景 (索掘・陶管井戸)
(2) I-A区 建物 号の雨落ち線
図 版 10 (1) I-A区 建物1号の溝状遺構
(2) I-A区 近代土城
図 版 11 金屋遺跡 I-B区遺構全景 (空中写真)
図 版 12 (1) I-B区 全景 (先の家の前面がC区)
(2) I-B区 近景 (東から)
図 版 13 (1) I-B区 住居跡群 (西から)
(2) 1号住居跡全景

- (3) 2号・3号住居跡全景
- 図版 14 (1) I-B区 鍛冶炉 上部遺構全景
(2) I-B区 鍛冶炉 下部遺構全景
- 図版 15 (1) I-B区 土塚墓群 全景
(2) I-B区 土塚墓群 近景
(3) I-B区 2・3土塚墓 近景
(4) I-B区 2・3土塚墓全掘 近景
- 図版 16 (1) I-B区中世土塚 全景
(2) I-B区pit100 遺物出土状況
(3) I-B区中世土塚2 近景
(4) I-B区中世土塚3 近景
- 図版 17 (1) I-B区pit46 遺物出土状況
(2) I-B区墓2 遺物出土状況
(3) I-B区中世土塚 茶釜1出土状況
(4) I-B区中世土塚 茶釜1近景
- 図版 18 (1) I-B区 井戸5号(桶井戸) 全景
(2) I-B区 井戸5号(桶井戸) 断面上部
(3) I-B区 井戸5号(桶井戸) 断面下部
(4) I-B区 井戸5号(桶井戸) 最下部状態
- 図版 19 金屋遺跡I-C区全景(東から)
- 図版 20 金屋遺跡II区全景(上から)
- 図版 21 (1) II区近景(東から)
(2) II区近世建物遺構近景(西から)
(3) II区西端の近世遺構近景(北から)
- 図版 22 (1) II区桶2遺構 全景
(2) II区桶2遺構 遺物を取り上げ後状況
(3) II区桶2遺構 桶底を取り上げ後状況
- 図版 23 (1) II区桶1遺構 全景
(2) II区桶1遺構 近景(遺物取り上げ後)
- 図版 24 (1) II区井戸1号(陶管井戸) 全景
(2) II区井戸1号(陶管井戸) 断面
- 図版 25 (1) II区南西建物遺構 全景(東から)
(2) II区南西建物遺構 近景(東から)

図版 26	金屋遺跡	井戸のいろいろ	(石組・桶・陶管・コンクリート)
図版 27	金屋遺跡	出土遺物 ①	(足釜他) 中世
図版 28	金屋遺跡	出土遺物 ②	(甕・火鉢) 中世
図版 29	金屋遺跡	出土遺物 ③	(皿 他) 中世
図版 30	金屋遺跡	出土遺物 ④	(スリ鉢) 中世
図版 31	金屋遺跡	出土遺物 ⑤	(土鍋・足釜) 中世
図版 32	金屋遺跡	出土遺物 ⑥	(茶釜) 中世
図版 33	金屋遺跡	出土遺物 ⑦	(火鉢) 中世
図版 34	金屋遺跡	出土遺物 ⑧	(火鉢) 中世
図版 35	金屋遺跡	出土遺物 ⑨	(井戸枠他) 近世
図版 36	金屋遺跡	出土遺物 ⑩	(土鍋・焙烙把手)
図版 37	金屋遺跡	出土遺物 ⑪	(貿易陶磁器・ガラス)
図版 38	金屋遺跡	出土遺物 ⑫	(とり瓶・桶底板・土製円盤・砥石・その他)
図版 39	金屋遺跡	出土遺物 ⑬	(貨幣)
図版 40	金屋遺跡	出土遺物 ⑭	(近世陶磁器)
図版 41	金屋遺跡	出土遺物 ⑮	(近世陶磁器)
図版 42	金屋遺跡	出土遺物 ⑯	(近代遺物)

挿 図 目 次

頁

第 1 図	行橋バイパス開通式 (1991年 8 月 6 日)	1
第 2 図	金屋遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)	4
第 3 図	金屋遺跡周辺地形図 (1/2,000)	6
第 4 図	金屋遺跡遺構配置図 (1/1,000)	8
第 5 図	出土遺物実測図 (表採・試掘) (1/2)	9
第 6 図	金屋A区遺構配置図 (1/200)	11
第 7 図	胞衣遺構実測図 (1/10)	12
第 8 図	出土遺物実測図 (胞衣壺) (1/2)	12
第 9 図	出土遺物実測図 (近世陶磁器他) (1/2)	14
第 10 図	溝状遺構土層実測図 (1/20)	15
第 11 図	A区井戸遺構実測図 (井戸 3 号・井戸 4 号) (1/30)	16
第 12 図	A区土坑 1 号遺構実測図 (1/30)	17
第 13 図	出土遺物実測図 (こたつ) (1/3)	18
第 14 図	金屋B区遺構配置図 (1/200) 折込み	18~19
第 15 図	住居跡遺構実測図 (1/60)	20、21
第 16 図	付設カマド実測図 (1/30)	20
第 17 図	B区井戸遺構実測図① (井戸 1 号・井戸 2 号) (1/30)	22
第 18 図	B区井戸遺構実測図② (井戸 3 号) (1/30) 折込み 2	22~23
第 19 図	B区井戸遺構実測図③ (井戸 4 号・井戸 5 号) (1/30) 折込み 2	22~23
第 20 図	土坑墓遺構実測図 (1~4 号土坑墓) (1/30)	23
第 21 図	鍛冶炉・1 号土坑遺構実測図 (1/30)	23
第 22 図	土坑遺構実測図 (1/10)	24
第 23 図	金屋C区遺構配置図 (1/200)	25
第 24 図	C区pit 1 遺物出土状況 (北から)	26
第 25 図	出土遺物実測図 (灯明皿) (1/2)	26
第 26 図	出土遺物実測図 (足釜) (1/3)	26
第 27 図	金屋II区遺構配置図 (1/200)	26~27
第 28 図	建物遺構 (掘立柱建物) (1/60)	28
第 29 図	井戸遺構 (井戸 1 号) (1/30)	29
第 30 図	井戸遺構 (井戸 2 号) (1/30)	29

第 31 図	洗場遺構実測図 (洗場 1) (1/30)	30
第 32 図	桶遺構実測図 (桶 1・桶 2) (1/20)	30
第 33 図	土坑遺構実測図 (Pit 1・Pit 29) (1/40)	31
第 34 図	埋竈遺構実測図 (竈 1) (1/20)	32
第 35 図	出土遺物実測図 ① (皿・椀・焙烙他) (1/2)	34
第 36 図	出土遺物実測図 ② (スリ鉢 1) (1/2)	35
第 37 図	出土遺物実測図 ③ (スリ鉢 2) (1/2)	36
第 38 図	出土遺物実測図 ④ (土鍋) (1/3)	37
第 39 図	出土遺物実測図 ⑤ (茶釜 1) (1/3)	38
第 40 図	出土遺物実測図 ⑥ (茶釜 2) (1/3)	39
第 41 図	出土遺物実測図 ⑦ (足釜 1) (1/3)	41
第 42 図	出土遺物実測図 ⑧ (足釜 2) (1/3)	42
第 43 図	出土遺物実測図 ⑨ (火鉢・風炉・香炉) (1/2)	43
第 44 図	出土遺物実測図 ⑩ (火鉢 2) (1/3)	44
第 45 図	出土遺物実測図 ⑪ (火鉢 3) (1/2)	45
第 46 図	出土遺物実測図 ⑫ (貿易陶磁器) (1/2)	46
第 47 図	出土遺物実測図 ⑬ (ガラス) (2/3)	48
第 48 図	出土遺物実測図 ⑭ (とり瓶) (1/4)	48
第 49 図	出土遺物実測図 ⑮ (漁具・土製円盤) (1/2)	49
第 50 図	出土遺物実測図 ⑯ (甕 1) (1/2)	50
第 51 図	出土遺物実測図 ⑰ (甕 2) (1/2)	51
第 52 図	出土遺物実測図 ⑱ (甕 3) (1/4)	52
第 53 図	出土遺物実測図 ⑲ (井戸枠 1) (1/4)	53
第 54 図	出土遺物実測図 ⑳ (井戸枠 2) (1/6)	54
第 55 図	出土遺物実測図 ㉑ (陶磁器類 1) (1/3)	55
第 56 図	出土遺物実測図 ㉒ (陶磁器類 2) (1/3)	55
第 57 図	出土遺物実測図 ㉓ (陶磁器類 3 スリ鉢) (1/3)	56
第 58 図	出土遺物実測図 ㉔ (桶底板) (1/6)	57
第 59 図	出土遺物実測図 ㉕ (石臼) (1/4)	58
第 60 図	出土遺物実測図 ㉖ (砥石) (1/2)	59
第 61 図	出土遺物実測図 ㉗ (貨幣)	60
第 62 図	出土遺物実測図 ㉘ (古墳時代土器) (1/3)	61
第 63 図	出土遺物実測図 ㉙ (玉) (1/1)	61

第 64 図	金屋遺跡 展開図 折り込み	64~65
第 65 図	井戸替図	66
第 66 図	浄喜寺 梵鐘 実測図 (1/10)	69

表 目 次

- 表 1 一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財一覧表
表 2 金屋遺跡出土一覧表 (挿図のみ)

付 図

金屋遺跡II区建物配置図 (1/200)

I. はじめに

1. 調査に至る経過 (第1図)

一般国道10号線は、北九州市を起点とし、東九州の主要な都市を経て鹿兒島市に至る延長約450kmの大動脈である。

北九州市より大分市に至る区間は、今後一層の需要と発展が予想される地域でもある。近年行橋市から豊前市にかけて、北九州市のベッドタウンとして脚光をあび、人口の増加の著しい地区で、国道の交通量も増加の一途をたどり、現在飽和状態に達している。

こうした中で、国道10号線の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一環として全延長約5.4kmの行橋バイパスが計画された。

事業化は昭和48年度に計画され、昭和59年工事着手となった。昭和59年9月(建九調933号)で、行橋バイパス路線内の埋蔵文化財の分布調査の依頼が出され、橋梁の下部工事については、工事着手されても支障がありませんという回答が出されている(59教文第631号)。

路線の橋脚部分以外の埋蔵文化財について、昭和60年7月に再度回答を出している。金屋地区には文献上から埋蔵文化財が存在する可能性がありますので、試掘調査が必要である由を回答し、他については、そのつど協議方を依頼していた(60教文1110号)。

昭和61年5月に福岡県教育委員会文化課は発掘事務所を、椎田バイパスを中心に、北が行橋バイパス、南が豊前バイパスと北大道路に關係する発掘調査が進行するために、椎田町に県文化課椎田事務所を設置させて、発掘調査の円滑化をはかった。

秋には、椎田バイパスの第1地点辻垣について、用地買収が終了したともない試掘調査を行い遺跡の確認がなされ、昭和62年度当初からの発掘調査となった。

一方、行橋バイパスは順調に橋梁の下部工事も終了し、一部農業用の仮設道路が付けられ、用地買収のコンクリート杭も埋設されていた。この時点で、新たに発見された行橋市大津留所在の津留遺跡の発掘調査を実施した。

この遺跡の発掘調査は昭和62年7月25日から昭和62年10月31日迄の約3ヶ月間であった。弥生時代終末から古墳時代初頭の生活遺構を中心にするものであった。

当該遺跡の金屋遺跡は菟川をはさんだ対岸にあって、標高3～4mの砂丘状に立地している。平成元年に試掘調査を実施して、平成2年4月1日から7月31日の4ヶ月間を充てた。



第1図 行橋バイパス開通式(1991.08.06)

平成3年度に整理・報告書を作成する事となった。

2ヶ所の遺跡を調査した行橋バイパスは、本年8月6日に河田町与原から行橋市辻垣までが前線開通した。河田町与原から行橋市街地を避けて海側を通過し、長狭川、今川及び畝川を渡り、終点で、現10号と立体交差で接続したのち、平成3年3月に供用開始した椎田道路に連結している。全長5.4kmである。

2. 調査の組織と関係者

平成2年度金屋遺跡の発掘調査及び整理報告をするにあたっての組織と関係者は、下記の通りである。

〔建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所〕

所長	森 久 (前任) 竹中幸生
副所長	九谷秀明 (前任) 中山高虎
建設専門官	田中睦憲
工務課課長	溝上利毅
工務係長	浅田敏光
設計係長	西嶋正男 (前任) 畑 法善
調査課課長	松崎安則
調査係長	田中敏則 (前任) 荒瀬美和
建設技官	井上敏彦 (前任) 沓掛 孝
建設監督官	田中常美 (前任) 児玉孝夫

〔福岡県教育委員会〕

総括 教育長	御手洗康
教育次長	光安常喜
指導第2部部長	月森清三郎
文化課課長	六本木聖久 (前任) 森山良一
参事	森本精造 石松好雄
課長補佐	安野義勝 (前任) 国武康友 松尾正俊
参事補佐	柳田康雄 井上裕弘 浜田信也 副島邦弘
調査 文化課調査班 (総括) 兼務	柳田康雄
	参事補佐 副島邦弘

主任技師 飛野博文

技師 小川泰樹

庶務

文化課管理係長 池原脩二(前任) 岸本実

なお、平成2年の発掘の担当は、副島邦弘参事補佐があたり、小川泰樹技師の協力を得た。
調査の準備段階に、金屋区(区長)白石正幸氏の協力を受けた。

調査及び整理中には一川淳江・川本義雄・宮本工・浜島三司諸氏の指導助言を受けた。

発掘作業には、下記の人々から協力を受けた。

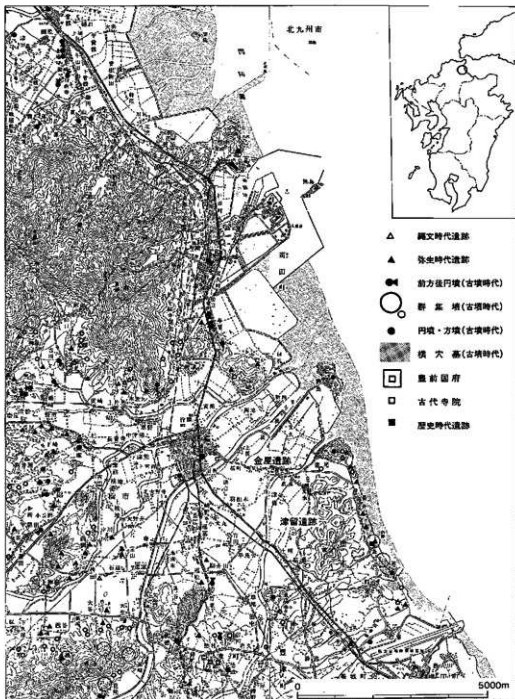
杉田勝・有本勝・小野志夫・植村利道・杉谷文代・西頭美代子・川口操・白石智子・福田孝子・西川裕子・森脇勢津子・坪根香代子・奥キミエ・宮岡艶子・山本喜美子・泉恭子・坪根美佐子・原田美紀子・溝辺慶子・荒上敬子・竹本美由起・三井恭子・末松浅枝・馬場清子・横山康子・中原三重子

整理報告書作成の折の、遺物整理については岩瀬正信が統括し、豊福弥生・平田春美・原カヨ子・水野美奈・土山真弓美緒氏の協力を受けた。

記して感謝の意を表す。

表1 一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財一覧表

地点名	遺跡名	遺跡の概要	対称面積(m ²)	発掘面積(m ²)	発掘調査	報告書
No.2	津留	散布地	15,000m ²	13,000m ²	昭和62年7月25日 ~昭和62年10月31日	行橋バイパス関係埋蔵 文化財調査報告第1集 1991.3.31
No.1	金屋	中世集落	5,000m ²	4,700m ²	平成2年4月1日 ~平成2年7月31日	本報告書



第2図 金屋遺跡の位置と周辺主要遺跡(1/50,000)

II. 位置と環境

行橋市を中心とする京都平野は、北から長峽川・今川・祓川の3本の河川によって、つくられた沖積平野である。

当該地区は今川下流右岸に位置し、中央部を江尻川も流れる。地名は、かつて鋳物師が居住したことに由来するという。当該地はもと今井に属していた。隣地の春日神社の沿革に「根津の海浜潮干潟数百町歩を開墾して耕地となし、大に農業を村民に奨励せし……承和元年社殿一字建立」とあり、地内西南部を東西に走る県道の北側は、かつて海浜であったが、中世以降埋立て、干拓が繰り返された。小字名も辰のほか、虎開・沖手開・沖の坪・沖下り口・横浜・大堤・井手の上・上川田・西川田・石川・東割・北割など新地理立てにちなむ地名が多い。

応永28年(1421)に鋳造された彦山霊山寺の梵鐘(現行橋市今井浄喜寺所蔵、県文化財)には「鋳物師大工豊前国今居住 左衛門尉藤原安氏作」と刻銘があり、永享12年(1440)鋳造の宗像郡沖屋崎町鏡殿宮の梵鐘にも「豊前州今井庄東金屋大工藤原吉安」とある。(註1)これらの鐘銘から当地が鋳物師大工らの居住地であったことが立証される。細川忠興が豊前国に入り、小倉に城を築き城下町の一面に鋳物師町をつくってから、国中の鋳物師大工は同町に移住した。

その後、江戸期にはいって、豊前国仲津郡のうち、小倉藩領で、元永手永に属す。130石余で細川氏時代の元和8年(1622)の家数29・人数44(男28・女16)、牛5、馬3(人畜改帳)。鎮守は、字観音寺に春日神社がある。その他に字金屋に貴船神社がある。

東北部、今川と江尻川の河口に位置する辰新開は字辰にあり、反別14町8反2畝で、辰歳に開いたという(京都郡誌)。隣接する文久干拓が完成後の明治元年(辰年)に干拓されたものであろう。明治3年の戸数31・人口140(男73・女67)であった。明治22年今元村の大字となる。昭和29年に行橋市合併して今日にいたっている。(註2) 周辺の遺跡を見ると弥生終末期の時期は、辻垣島田・長通・ヲサマル等や徳永川の上遺跡が名高い。その周辺部の丘陵には、古墳群や横穴墓群がみられ、豊津には豊前国府や国分寺・国分尼寺が造営され、豊前国の中心がこの祓川流域である。河口から5km上流に位置する。

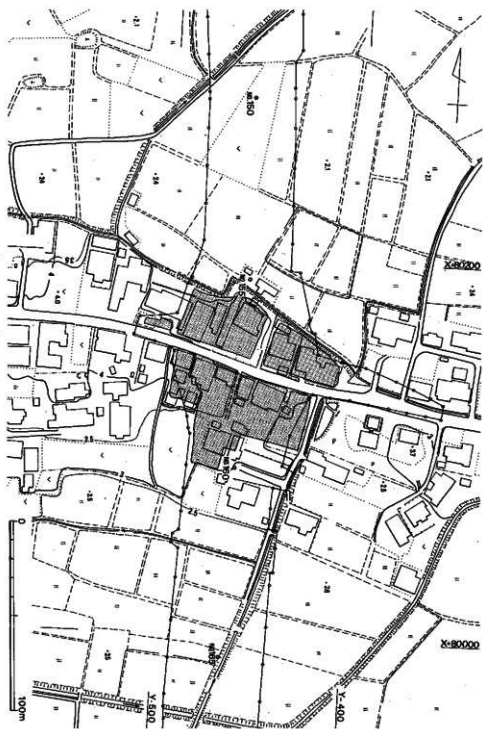
この河口が、当時の港であった津留や今井の湊となるわけで、今井には市が立ち、中世期には、郡内唯一の積出し港として、瀬戸内海を通して京へと通じている。

当該地が今井の市の横で鋳物大工の集落があったと推定される場所で、本発掘調査は、鋳物大工の工房跡を検出することを目的とした。この地は中世以後大内氏の統治下に栄え、江戸期には普通の農村村落を形成したと考えられる。享保飢饉の餓死者は40人で、開善寺の過去帳には記録されている。

註1、『福岡県百科事典』上・下 西日本新聞社版 1982

註2、『角川日本地名大辞典40福岡県』 角川書店 1988

第3圖 金屬遺跡 周辺地形圖 (1/2,000)



III. 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要 (第3~64図、図版1~3)

当該遺跡の、ほぼ中央部を東西に幅6m前後の県道沓尾一大通線が走っている。標高は3mから4m前後の旧海岸砂丘状堤防を走っているものである。遺跡は旧海岸砂丘状に立地する。

県道を狭んで、北側をI区とし、東からA・B・Cの3分したもので、南側をII区として調査区を設定した。地籍は大字金屋字金屋で、I区Aは317-1と318-1、B区319-1・321・322-1の一部・C区322-1の南側の一部で、II区は316・316-1・315・314-2・314-1・312・311・313・279を含めて発掘調査を実施した。

金屋I・II区から検出された遺構は

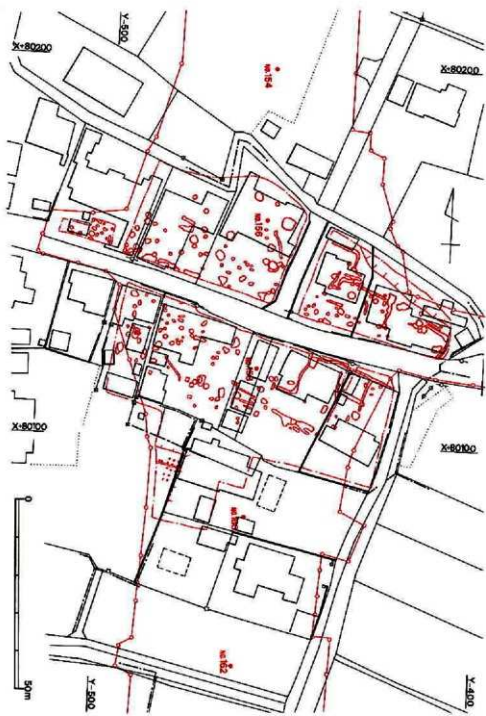
井戸	素堀	6
	石組	4
	桶	2
陶管(土管)		4
コンクリート		5
竪穴住居跡		3軒(歴史時代)カマドをもつもの1
溝状遺構		20本
土 墳		20
鍛冶炉		2基
建物		4+α
柱穴群		

これらの遺構は、主に中世の15世紀を中心に近世は江戸中頃、そして明治・大正・昭和までの生活遺構と遺物を重複して検出されている。ここでは中世(室町)を主にスポットをあてて説明したい。

以下、項を改ためてI区から説明を付したい。最後IVの中で、遺構の時間的な展開を図示する。

2. 生活遺構と遺物 (第4~63図、図版4~42)

金屋遺跡の試掘は、平成元年度の3月に実施した。試掘によって、中世から近代までの継続する遺構とそれに伴う遺物が採集された。



第4図 金剛塔跡の平面図(1/1,000)

(1) 試掘調査 (第3図、図版3)

試掘の折りの出土した遺物は、ポリ袋で一杯分であったが、トレンチを9本入れて、遺跡の分布状態を調べた。北側は排水路まで、南側は279番地までであった。約5000㎡であるということが判明し、県道が標高としては高く、北側は徐々に落ちていく。南側は50mまでは徐々に落ちるが、それ以後は急激に落ち込んで、湿地(入江)となっていることがわかった。いわゆる海岸堤防上になっているもので、砂層が砂丘状を呈しているものである。

採集された遺物 (第5図、図版42-下)

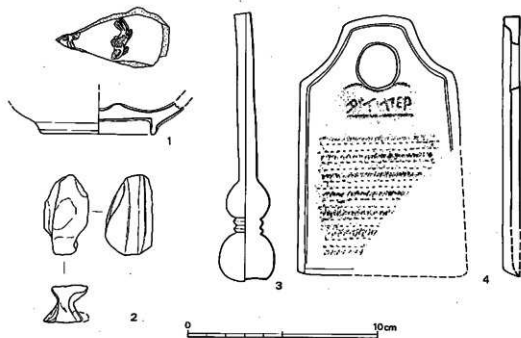
量はすくないが、その主要なものを上げた。

青磁(①) 中国製の貿易陶磁器で、器種は小皿で、見込みに双魚文をもつもので、釉調は淡い草色で、曇付けもきれいに調整されている。竜泉窯で、時期的には14世紀前半代。

土鍾(②) 胎土に砂を多く含み、色調は褐色で、焼成は良好である。一部欠損しているが形は歪んでいるもので、漁業用として使用されているもので、重量は19.6gである。

ガラス瓶(③) 大正・昭和20年代まで使用された瓶で瓢型を呈している。一般的に子供用の水菓子で、肉桂(ニッケー)水を入れていたものである。

オロシ金(④) 表採品で、陶製のオロシ金である。戦前から戦中・戦後の30年代まで使用され



第5図 出土遺物実測図(表採・試掘)(1/2)

たもので、炊材の大根・人参・山葵等のおろし器である。製品名もかかれ、多量生産されたものである。釉は白釉である。

遺構の説明を前段に行って、その後に遺物を説明する。遺物は、器種分類して説明したい。この遺跡の主目的は中世の遺構と遺物である。

(2) I 区 (第4図、図版3)

A 区 (第6図、図版5～10)

現代の建物が、2棟建っていたもので、これに付属して納屋等もみられ、建物の数は5である。主屋と納屋の組み合わせである。それを取り除いて見ると最後部で約50cm下がった状態で、順々に下がって水路にはいっていき、灰色のまじりけのない砂層がみられ、これを切って遺構がつくられている。この面がほぼ中世の時期として捕えた。

遺構は県道側に集中してみられ、北側に行くほど近世や近代の遺構に切られている。遺構は井戸等が中心であり、一部に近世の明治・大正期建物の基礎や雨落ちの溝がみられる。

第4図では二筆に分けられているが、明治期では一筆で、水路を順々に侵略していっていることが理解できる。当初は水路で水洗いができていた模様である。中世遺構はほぼ近世の基礎より南側の道路よりにある。高麗青磁・土師器の小皿・火鉢類(第46図、図版37)等がみられ、日常雑器類であった。東側の建物は素掘の井戸が初めのもので、土管の井戸が後出であるため、2軒の重複か、あるいはつくり直しが考えられる。しかしながらあまりにも近すぎるので不自然である。

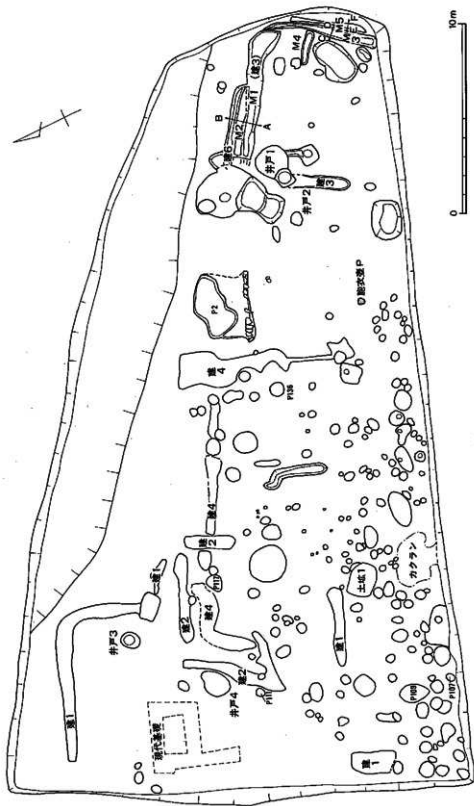
すなわち、溝3が北・東・西と三方を囲み、井戸1(素掘り)→井戸2(土管)へ移動しているのを見ると時間的には長い時間の経過が考えられる。現代の家が引き込んでいるものと、井戸とが考えられる。表土割ぎの時、家は撤去したが水道の塩化ビニール管を切ってしまったため、水が吹き出し作業が停滞した。水道管は生きたままであった。井戸水を使用していたわけでないことがわかった。西側の現代住居はコンクリートの井戸を水源として使用している。

撤去された現代の住居の基礎は余り見られず、一世代前の建物の井戸あるいは深くほった基礎等がみられた。

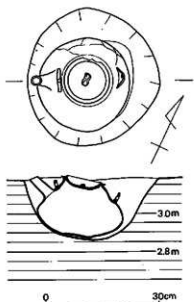
周辺部の溝からは、近世の明治・大正・昭和期にはいる遺物も多く検出した。胞衣壺(第8図・図版42-③)もみられたことにより、大正末から昭和期のものとみられる。

建物1の北側溝の中からはランプのホヤ・カサ等が出土している。

一応、建物は5度の建て直しが実施されている。出土した遺物は日常雑器類であった。



第6図 金屋A区遺構配置図(1/200)



第7図 胞衣遺構尖測図(1/10)

胞衣遺構(第7図、図版8)

撤去された現代住宅の戸口に位置(第6図)しているが、どうも深すぎるので、一代前の建物の遺構と考えた方が妥当である。平面形は円形をなし、断面は摺鉢状に落ちる。大きさは直径35cm、深さ16cmで、土瓶が埋設されていた。胞衣壺と称するもので、子供を出産後の後産を入れるものを言うわけで、産所の床下、便所の前、家の戸口等が選ばれるものである。埋めた上を最初に通ったものを生児が一生物れるというので、父親が直ちにまたぐ、この風習は広く分布しているが、自分の家を出産することが多かった昭和20年代までのもので、30年代以後にはこの風習は少なくなっている。出産は病院ですることが普及したためである。

この風習は足利時代の記録にも貴人の胞衣納めの作法として記録されている。

土瓶(第8図、図版42-③) 胞子壺として利用されたもので、蓋付の土瓶であるが、蓋と土瓶とは相異なるもので、土瓶の蓋は宝珠ツマミのものであると考えられる。この蓋は塩壺のものを転用している。胞衣を入れる瓶は茶を入れた土瓶で口径11cm、底径7.6cm、最大胴径21.6cm、器高14.4~14.6cmである。胎土は精良な粘土を使用し、色調は白黄橙色で、透明釉を施している。焼成は軟質で注口部の内孔に意識的に孔を欠けている。器面の2/3は釉を掛けているが、胴部下半は土見がみられる。底部は上げ底で、内面の口縁部付近には釉を施している。信楽系の焼物で、薄手につくられている。文様は刷毛を束ねて小口にて、順手回転したものである。

蓋(第8図、図版42-③) 転用された落し蓋で、塩壺のものと考えられる。口径9.6cm、底径4.9cm、器高3cmで、内面にツマミを有する。胎土には精良な粘土を使用し、色調は淡黄橙色で、釉調は青味を帯びた灰色である。

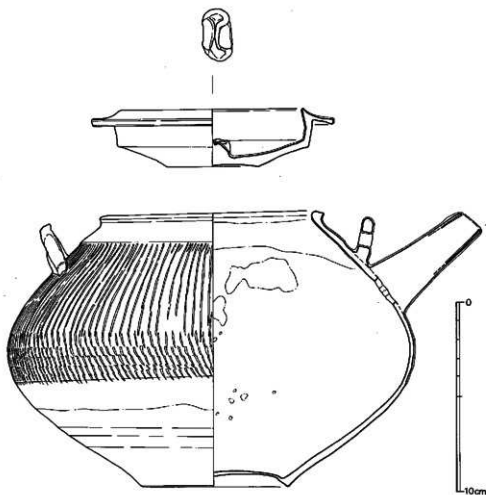
溝状遺構(第6図、図版10)

建物遺構の雨落ち溝で、大別して6本の溝としてまとめた。(第6図)

建物1の溝からはランプのカサ等のガラス製品・瓶・近世陶磁器が検出されている。各溝とも近世陶磁器類が中心に検出されている。

この近世の建物の溝にも新旧関係が存在している。

建物2から出土したものは土錘である。建物4からは甕が出土し、建物5は信楽系のぐい呑



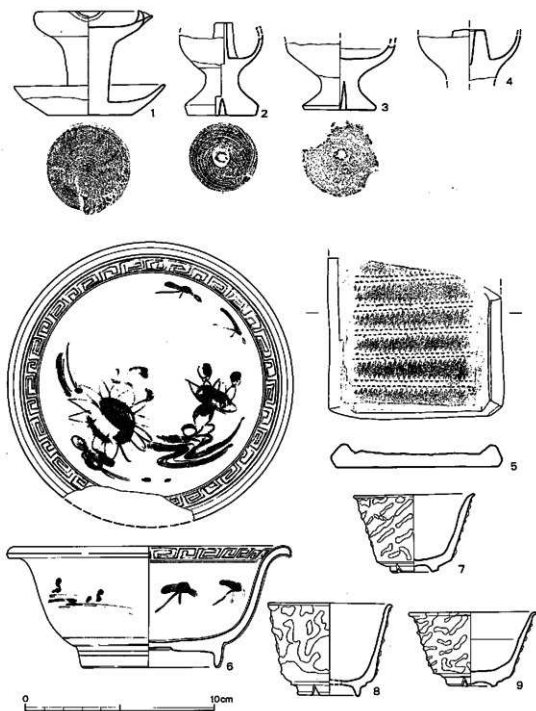
第8回 出土遺物実測図(胞衣甕)(1/2)

み・小皿・中皿・茶椀・スリ鉢・一弁徳利等が検出している。建物6からは、焙烙の把手や一弁徳利・ビール瓶等が出土している。

出土遺物(第9回、図版38)

スリ鉢(第57回-⑩) ⑩は胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色、焼成は硬質である。近代の昭和期のもので、釉は褐釉である。建物5の北溝から出土している。

瓶(第55回-①) 胎土に精良の粘土を使用し、色調は暗灰色で、釉調は白褐灰色を呈し、文字を鉄釉で入れている。いわゆる貧乏徳利である。残存高29.5cm、最大胴径17.2cm、底径11.3cm、文字が3ヶ所に入る、2ヶ所は一部あるいはほぼ全部を欠損する。文字は藤屋酒場と読める。



第9圖 出土遺物実測図(近世陶磁器他)(1/2)

中皿（第9図一⑥）胎土には精良なる粘土を使用し、染付けの中皿で、釉調は白釉で、見込みに蝶が2匹と水草（水蓮）を浮かべ、水の流れを表現している。口縁部に雷文を一廻らせる。表面には、水草を抽象化したものを3ヶ所に入れている。高台内底は剥ぎとりしている。磁器物である。器高6.4cmで、内底には砂目のがこっている。建物5の北溝から出土している。

ぐい呑み（第9図⑦⑧⑨）信楽系のもので3点出土している。建5の北溝から、口径5.8～6.4cmで器も4.0cm前後である。高台は切り高台で3ヶ所ある。器面には点掛玉状に絞ったと称するものがみえる。透明釉いわゆる長石釉を使用している。これと同一のものは、信楽町漆原C遺跡の信楽焼の窯跡から出土しているし、同様なものは明治10年代の遺物と共伴して千代田区紀尾井町遺跡より検出されている。明治初年から中頃の遺物である。3点とも胎土は精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、焼成は良好である。

茶碗（図版41） 染付け類が中心である。

小皿（図版40） 染付け類が中心である。

建物1・建物2・建物3・建4からも染付の茶碗・皿類の日常雑器類がみられる。

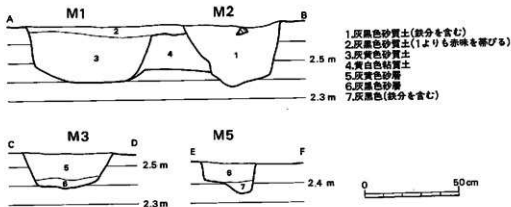
土鍾（第49図一⑤）管状の土製品で、胎土に細粒砂を含み、色調は赤黄色で、焼成は良好で、重量は2.7g。建物2溝より出土。

土製円盤（第49図一⑩）胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。建物1の溝から出土している。重量12g。

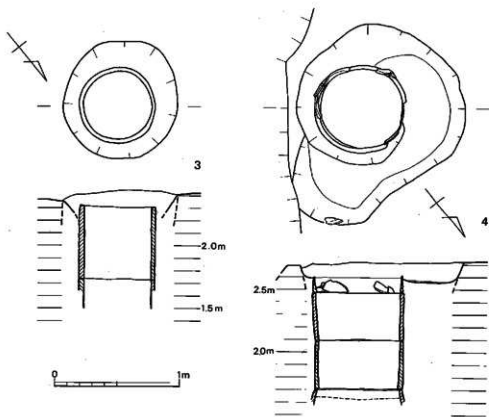
灯明具（第9図一①）建2の溝より出土したもので、仏具として使用された、ひょうそくである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰白色で釉調は鉄釉で、焼成は良好で、底部は糸切り。

井戸遺構（第6・11図、図版5・9）

4ヶ所が検出されたが、素堀の井戸1・土管井戸2・コンクリートの井戸1であった。



第10図 溝状遺構土層実測図(1/20)



第11図 A区井戸遺構実測図(井戸3号・井戸4号)(1/30) 番号は井戸の番号

井戸1号 (第6図) 素掘の井戸で、これを切って土管井戸2号がある。直径3m、深さ3mである。ほぼ垂直に落ち込んでいる。

井戸2号 (第6図) 土管の井戸で、素掘井戸よりも後出している。井戸枠の直径0.8m、長さ35cmで、5段ほどつぎ合されているつぎ目には、漆喰を入れて密着させている。一まわり大きな掘り方をほって埋設されているものである。水脈源は浅い位置にあるため、深い井戸にならなかったと考えられる。時期的には明治後半と考えられる。

井戸3号 (第11図) コンクリート製の井戸で、現在まで使用されていたもの。直径0.6m、一段目の長さ0.6mである。4段ないしは5段目までが底になるもので、5段目の面まで確認できた。

井戸4号 (第11図) 土管製の井戸である直径78cmで、長さが36cm前後のもの。これを組み合せて、水源まで達するものである。4段目の面まで確認した、時期的には他の土管製の井戸と同じ時期で明治初年頃から明治後半までの間、これが変化してコンクリート製のものに変化し、コンクリートの直径が小さくなってくると思われる。

土壇 (第12図)

平面形は不整形を呈するもので、大きさが長軸30cm以上のもので、断面が垂直あるいは摺鉢状に落ちているもの。时期的には近世・近代のものがこの区では多く、中世のものは少なかったため、中世の遺物が検出されたものを土壇とした。他はpitとして番号付した。

土壇1号(第12図、図版5)

平面形が隅丸方形を呈しているもので、縦140cm、横180cm、

深さ15cmで、壁は垂直に落ちている底面形も同じ隅丸方形である。出土遺物は火舎が出ている。

pit 136 (第6図、図版10) 近代のものが多く残っているものである。

出土遺物 (第9・13図、図版35)

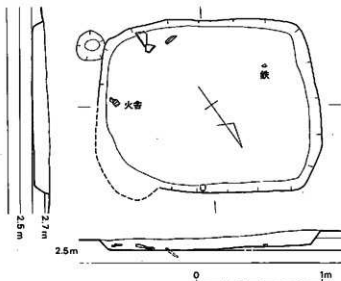
こたつ (第13図) 瓦質のもので、挟入式のもので、上の覆の部分欠損している。脚の前脚もはずれている。炭火を入れて、こたつとして暖房したものである。江戸の後半から明治にかけてのもので、pit109から出土している。

灯明具 (第9図-②③④) pit117から3点出土している。ひょうそくである。行燈にセットできる様に中心部に釘穴がある。中心に芯棒をもつもの②と、有しないもの③とがある。基本的には行燈または高提燈と一括されるもの。また固定されるものである。ナクネ油を入れて、木綿をよった火縄を芯と、炎先とした。江戸後期の所産。

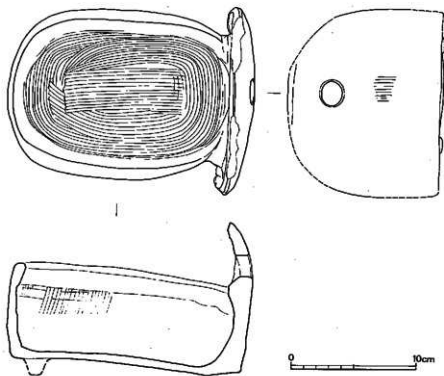
おろし金 (第9図-⑤) 陶製のおろし金で、大根・人参等をおろしたもので、表全面に鉄釉を施している。胎土は細粒砂を含み、色調は褐色、焼成は良好である。2層面床上の表面で採集されたもの。明治期のものと考えられる。

壺 (第52図-⑦) 胎土に砂を多く含み、色調は灰白色で、焼成は良好である。pit54から出土している。

他に近世陶磁器や鉄製も出土している。



第12図 A区 土壇1号遺構実測図(1/30)



第13図 出土遺物実測図(こたつ)(1/3)

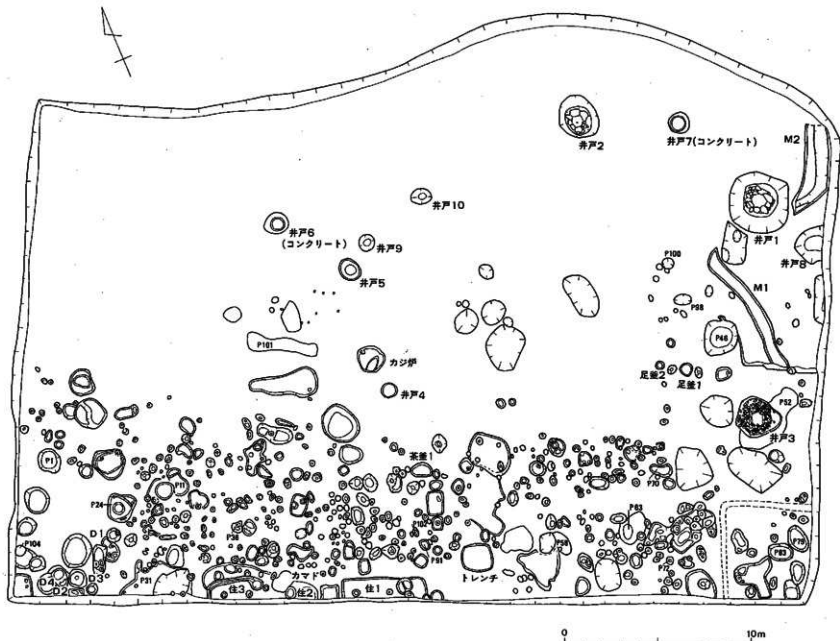
B区(第14図、図版11・12)

撤去された現在の建物は第4図の様に2軒と西側の納屋の部分であった。第14図は遺構の分布図である。それから見ると湧水線で外と内とは、完全に分けられる。

出土した遺構の主要なものは、住居跡3軒と井戸(石組・素掘・桶・コンクリート製等)、中世の土壇基4基と土塚4基(遺物がいっている主なもの)、溝状遺構、柱穴群、近世の柱穴及び現代のゴミ穴、車庫等の基礎であった。中世の遺物は遺構に伴うものが多くみられた。ゆくりなくも鍛冶炉の検出があった。以下主要な遺構を中心に述べて見よう。

住居跡遺構(第15図、図版13)

B区からは3軒出土したが、北側の一辺のみ検出された2・3号住は重複しており、2号住にはカマドをもっていた。切り合い関係は2号住を切って、3号住がつくられていた。時期は床面等から、若干の遺物がみられている。青磁・鍋・壺及び瓦質の小破片が検出しているので、歴史時代の中世期のものと考えられるが全圖でないため、疑問点が残る。



第14図 金屋B区遺構配置図(1/200)

Dは土壌基 略 足釜1が1号土坑 茶釜1が1号土坑
 住は住居跡 略 足釜2が3号土坑 P100 が4号土坑

1号住居跡(第15図、図版13) 北側の一辺のみ検出されたもので、平面形は方形と呈している。一辺は4.50mで、残存辺は100cm、90cmである。壁高は10cm前後、この住居に伴う柱穴は●印のついている住居跡である。遺物としては瓦器、青磁の破片(竜泉)、カメ等が出土している。青磁は13世紀代のもの。

2号住居跡(第15図、図版13) カマドを有する住居跡で北側一辺のみ検出されている。この住居跡を切って、3号住居跡がつくられている。平面形は隅丸方形を呈し、一辺6.0m、残辺は0.6m、1.50mである。壁高は13cm前後である北東側にカマドを有し、柱穴は3本柱と考えられる。●印がついたのが柱である。床面に密着した状態で遺物の検出はみられなかった。カマドの状態を見るためたち切ってみると、第16図のようである。床面と炭化物を含んだ砂と真赤に焼けた砂であった。この中から土器片が1点出土している。土鍋の破片で、中世のものである。どうみても14世紀末から15世紀半頃のものである。

3号住居跡(第15図、図版13) これを北側の一辺のみで、平面形は方形を呈し、一辺が3.5mで、残存長は90cm、東側の一辺は不明である。■印が柱穴である。床面からの出土物は見られなかった。中世期に攪乱がはいっている。

井戸遺構(第17～19図、図版11・18・26)

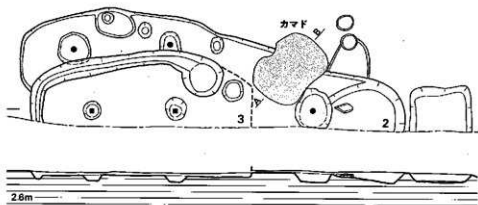
B区からは茶搦3基・石組3基・桶2基・コンクリート2基の10基の井戸が検出されている。

井戸1号(第17図、図版11) B区の北東端部において、掘り方の長軸2.00cm、短軸185cmで、井戸の内径70～80cm前後である。手頃の河原石を切って、基部を切石積状に組んでいる。宇野氏が旨う石組円筒形の井戸に分類される。深さは1.20cmまで掘り下げた。

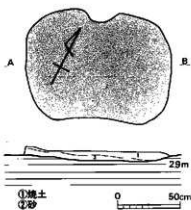
井戸2号(第17図、図版11・26) 井戸7号の横にある石組の井戸で、掘り方の線は長軸150cm、短軸150cmである。深さ100cm以上で、水神上げを行なって井戸を廃棄している。その名残りが木板をさし込んでその下に竹を井戸底にさしている。井戸の内径は、長軸60cm、短軸55cm、基部に近いものである。石組円筒形の井戸である。

井戸3号(第18図、図版11・26) 東側端のほぼ中央部において、周辺部に井戸の上部構造の木材が検出された。遺物としては焙烙・土師器皿(灯明皿)が出土している。とり瓶も出土している。掘り方は長軸が2.40m、短軸が2.20mで井戸底まで90cmである。井戸内径は70cm前後で底に行くほど内側に傾むく、基部に石を立てて河原石を小石積みに積上げて、裏込めの状況も、ほかの石組井戸と相異なる。石組すり鉢形の井戸と考えられる。

井戸4号(第19図、図版11) B区の中央部において、桶状の木材が残っているもので、基部のみのものである。湧水線状に位置する。側面に木材の痕跡が残っている。直径80cmで、ぎりぎりに桶を入れている、断面はすり鉢状に落ち込んでいる。残存の深さは10cm前後である。



第15図 住居跡遺構実測図(1/60)



第16図 付設カマド実測図(1/30)

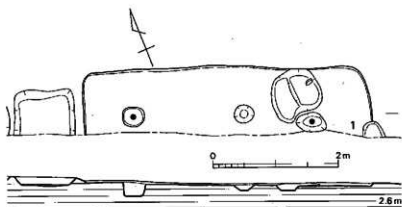
井戸5号(第19図、図版18) 索掘井戸9号の横にあって、典型的な桶積上げ井戸である。水神上げ祭祀をおこなっている様子が理解できる。また穴塞まで行なっている。5個の桶を積上げたもので、底まで200cm、桶は直径50cm、高さ50cm、底径43cmである。基底はジャリ層で、桶と桶との接点は河原石と灰色粘土で裏込めしている。基底部と2段目の後詰めはしっかりしている。最下部の桶には、鉄製の容器が残っていた。いわゆる釣瓶と称するもので、木製でなく鉄製であることが興味を引く、深層まで発掘調査を行なったものである。

井戸6号(第14図、図版11・26) コンクリート製の井戸枠である。直径80cm、深さ60cmで基底部の一段上のものであった。上面欠損している。時期的には、戦前のものである。取り壊された家のものではない。水神あげの祭をおこなっていた。

井戸7号(第14図、図版11・26) コンクリート製の井戸枠である。6号より直径が小さくなるため、時代が新しくなる。一段目の枠は直径60cm、深さ30cmで、3段目まで確認できた。深さは約1mであった。取り壊された家の横で、図面に井戸の位置がのっている。最近まで使用されていたものと見える。

井戸8号(第14図、図版11) 索掘りの井戸で、東側端部に半欠状態で出土したものである。直径が1.20cmで垂直に落ち込むので、一応井戸とした。

井戸9号(第14図、図版11) 井戸5号の横にあるもので、直径80cmで直に落ちる。遺物の検出は見られない。



井戸10号(第14図、図版11) 井戸9号と井戸2号のまん中に位置するもので、直径100cmで直に落ち込んでいる。遺物の検出なし。

土塚墓(第14・20図、図版15)

西端で4基の土塚墓を確認した。河原石が組まれ標式をもったものであった。

1号土塚墓(第20図、図版15) 平面形は長方形をなすもので、南側に河原石を積み上げて標式としている。主軸をN-19°-Wで、長軸が160cmで、短軸が75cm、深さが20cm前後を計測する。標高3.15mである。遺物はみられなかった。

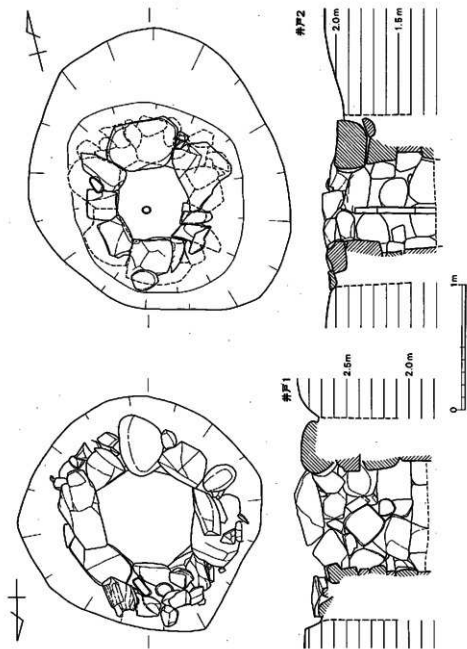
2号土塚墓(第20図、図版15) 4号に切られているもので、平面形は隅丸不整形を呈し、周囲を粘土がまいている様な状態であった。南側に標式をもつもので、断面はスリ鉢状に落ちる。主軸をN-30°-Eにおき、長軸110cm、短軸70cmで、深さ25cm前後を計測する。時期的には4号土塚墓に切られている。

3号土塚墓(第20図、図版15) 平面形は円形をなし、それを15cm前後の粘土がまいているもので、主軸をN-15°-Eにとり、断面はスリ鉢状に落ち込む、2号土塚に切られているが、直径100cm前後を計測する。出土遺物はみられない。

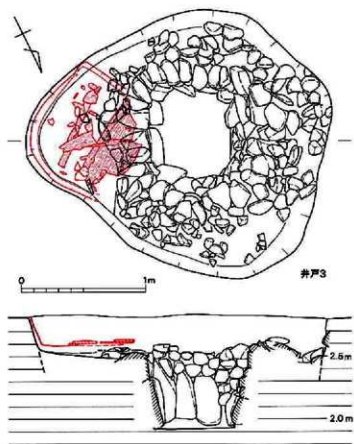
4号土塚墓(第20図、図版15) 平面形は円形をなすもので、ウルシの一部が、床面より浮いた状態で検出されている。直径が1m前後を計測する。深さは20cm前後で、近世の茶碗類が上面から出土している。石は組まれた様な状態ではない。2号を切っている。

土塚(第14図、図版16・17)

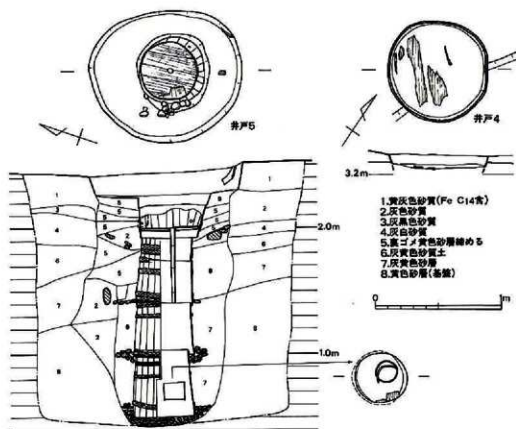
ピットより大きいもので、茶釜と足釜がはいった中世のものを土塚として上げた。



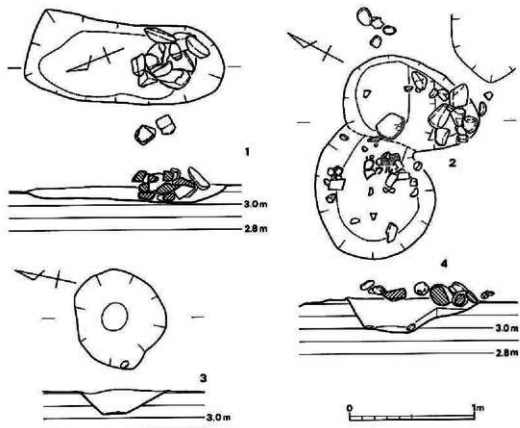
第17图 B区 井戸遺構実測图 ① (井戸1号・井戸2号)(1/30)



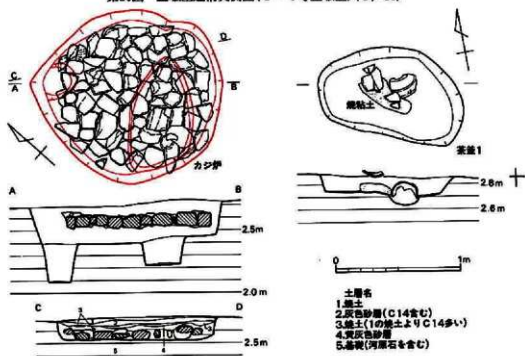
第18图 B区 井戸遺構実測図㉒(井戸3号)(1/30)



第19图 B区 井戸遺構実測図㉓(井戸4号・井戸5号)(1/30)

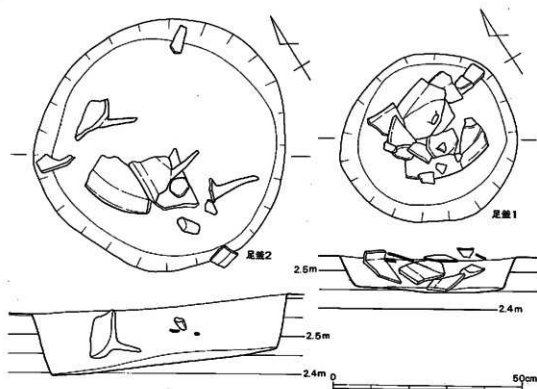


第20図 土坑窯遺構実測図(1~4号土坑窯)(1/30)



第21図 鍛冶炉・1号土坑遺構実測図(1/30)

- 土層名
- 1.黒土
 - 2.灰色砂層(C14含む)
 - 3.焼土(1の焼土よりC14多い)
 - 4.黄灰色砂層
 - 5.基岩(河原石を含む)



第22図 土坑遺構実測図(1/10)

1号土坑(第21図、図版17) 湧水線上にあって、茶釜が出土している。平面形は不整円形で主軸をN-80°-Eで長軸120cm、短軸が70cmで深さ20cm前後を計測する。ほぼ中央部に茶釜があり、その上面に火鉢の破片が燃土の上に乗って浮いた状態であった。この土坑の時期は15世紀半頃に考えられる。茶釜1として第14図に表示する。焼土には炉として使用された一部分で粘土が固ったもの。

2号土坑(第22図、図版16) 足釜を検出した土坑で、平面形はほぼ円形で直径70cmで深さ15cm前後である。1個体になるものである。

3号土坑(第22図、図版16) 平面形はほぼ円形を呈し、足釜がつぶれた状態で検出された。直径50cm前後で、深さ10cmである。

4号土坑(第14図、図版16) pit100で上げたものであるが、足釜の半欠が出土したため、土坑に格上げした。平面形は円形を呈し、深さ20cm前後である。時期は茶釜を出土した1号土坑と同時期である。

鍛冶炉 (第21図、図版14)

鍛冶に関するものは1基のみであった。井戸4号と井戸5号との間にあるものである。

1号鍛冶炉(第21図、図版14) 平面形は円形を呈し、床面に角礫を敷きつめている。礫の表面は赤変している。断面図を見ると2枚の焼土があって、間層の第2層は灰色砂層で炭化物を含んでいる。敷石と2次焼土面の間層は黄灰色砂層で粘土質を含んだもので床としたものである。敷石を敷いた面より若干下がって基盤の灰色層の硬い面にいたっている。下面に柱穴状の遺構を検出している。

溝状遺構 (第14図、図版11)

B区の東端部に溝1と溝2の2本のものがある。

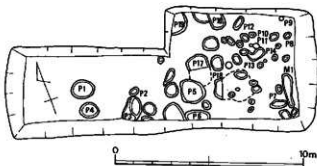
溝1(第14図、図版11) 排水溝で時期的には中世期のもので、足釜等の出土がみられた。全長7m、巾が70cmで、深さ30cm前後である。北へ行くほど浅くなるものである。断面はU字形をなしている。

溝2(第14図、図版11) 東端部にあるもので、井戸1号の排水溝である。全長5m以上で2段状になっているものである。深さは40cm前後で、中に拳大の石が落ち込んでいる。

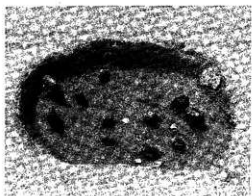
中世の遺物についてはまとめて後に記述する。

C区 (第23~26図、図版19)

家の前庭部の庭を調査したもので15m×6mトレンチを入れたが、中央部から4m幅となるため逆L字になる。遺構は柱穴群を捕えた。遺物からは、中世期の柱穴群であった。足釜や土師器小皿等が見られた。pit1からは銭と鉄釘等が出土している。第24図の様に。



第23図 金屋C区遺構配置図(1/200)



第24図 C区 Pit1 遺物出土状況(北から)



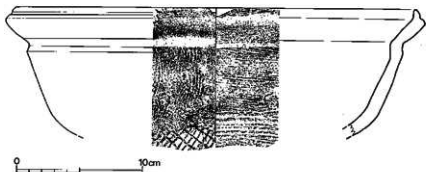
第25図 出土遺物実測図(灯明皿)(1/2)

出土遺物(第25・26図、図版31)

灯明皿(第25図) 胎土に細粒砂を含み、色調は褐色で、焼成は良好であった。口径8.4cm、器高1.5cm、底部には糸切り痕がある。

足釜(第26図) 胎土に砂を含み、色調は灰白色で、表面にススが附着して黒変している。焼成は良好で相当に使用されている。足がつくものである。器面の調節は、胴部下半にタタキを有し、頸部下半は指痕上にカキメを施している。内面は指痕の上を横位方向にカキメを施している。

時期的には14世紀末から15世紀前半頃の所産である。



第26図 出土遺物実測図(足釜)(1/3)

(3) II区 (第27図、図版20)

県道の南側全体3,000㎡をII区と称したもので検出された、中世建物2棟・井戸遺構(石組・土管・コンクリート・素掘)・洗場・桶・土壇・建物礎石・柱穴群・溝状遺構等を検出した。近世から近代が中心であった。

建物遺構 (第28図、図版25)

南西の端に、2間×2間の建物と1間×1間の建物が建つ。

建物1(第28図、図版25) 2間×2間の総柱の建物である。柱間寸法は東西方向2.57~2.75mで、南北方向2.67~2.70mである。時期は中世期か?

建物2(第28図、図版25) 1間×1間の総柱の建物で、この様な建物は屋敷神の祠の様なものである。時期は建物1と同じ時期。

井戸遺構 (第27・29・30図、図版24・26)

II区の井戸は石組1基・陶管井戸2基・コンクリート2基等が検出された。

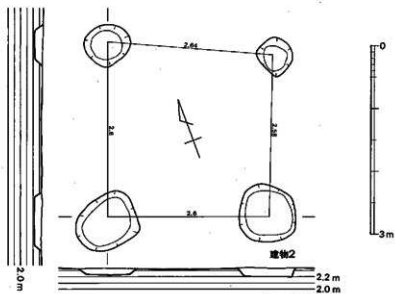
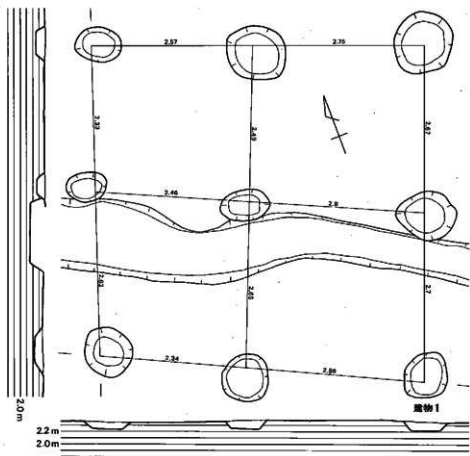
井戸1号(第29図、図版26) II区のほぼ中央部にあつて、石組の井戸である。上部構造は壊されている。下部は面をそろえているもので、水神上げの祭がみられなかった。石組円筒形に分類できる。掘り方の平面形は円形をなして、直径160cmで、井戸側の直径は60cm前後を計測する。

井戸2号(第30図、図版20) 洗場2の横にあつて、素焼の土管で、直径70cm、器高38cm前後で、深くなるほど径が短かくなっていく。上端の方が若干大きく、下端にいくほど1.2cm径が小さい。組合せの井戸側である。危険であつたので、重機をもって、下部を確認した。それが図版24である。8段を確認した。上部構造にはこれに井桁がつくものである。現在の家のものとは相異して一時代前のもので、大正末期から昭和10年代のものである。現在の家が壊される前には庭の位置にあつた。

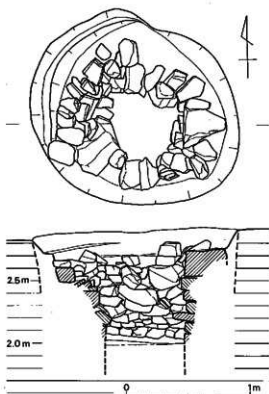
井戸3号(第27図、図版20) 立ち退き前の家の側に位置する。土管の井戸枠の組合せのものである。直径は井戸2号と同じである。これが、コンクリート製の井戸に変わっている。4m東に移動したもので、井戸4号である。

井戸4号(第27図、図版20) 立ち退き前の家の側にあつて、コンクリート製の井戸である。この井戸枠が4~5段に組み合されているものである。直径70cmである。最近まで使用されていたもので、水道以前ののものである。

井戸5号(第27図、図版20) 立ち退き前の住宅の中にあつたもので、コンクリート製の井



第28圖 建物遺構(孤立柱建物)(1/60)

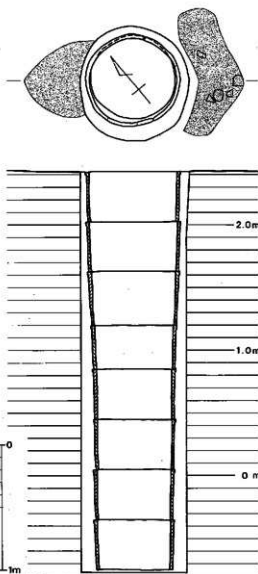


第29図 井戸遺構(井戸1号)(1/30)

戸である。直径が一まわり小さいもので50cm前後である。最近まで使用されていたもので、水道以前のもので、昭和20年代以降のものである。

井戸6号(第27図、図版20) 立ち退き前の家の中にあるもので、コンクリート製で直径が大きく70cm前後を計測する。コンクリートの枠を段々に組み合わせるものである。最近まで使用されていたと思われる。

井戸7号(第27図、図版20) 溝状遺構5の南側のもので、平面形は不整形をなすもの。井戸側の壁は垂直に落ち込むものである。1.5m掘下げたところで、水が湧きでてきたので、そこでとめた。砂地のため危険であると思い中断したものである。II区の中では一番古いものと考えられる。江戸期のもので、板材がなくなった桶井戸の可能性もある。位置からみると、春日大神社の参道に近い。

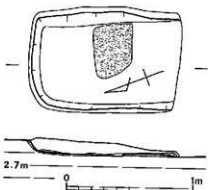


第30図 井戸遺構(井戸2号)(1/30)

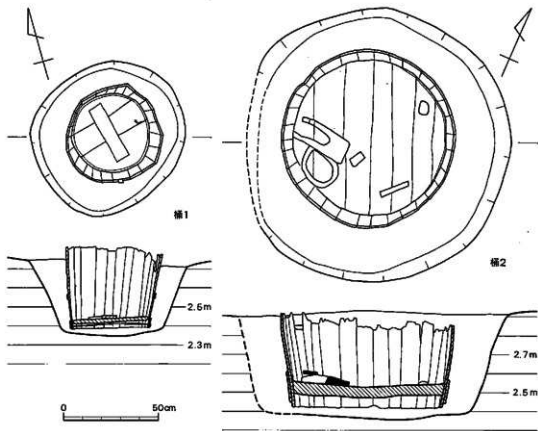
洗場遺構 (第27図、図版20)

II区の洗場遺構は流しをもっているものを中心に洗場 8 まで数字を上げた。中央部の西側に分布している。

洗場 1 (第27・31図、図版20) 桶 2 を切って洗場がつくられているもので、平面形は長方形を呈している。横が120cm、縦が80cmである。深さが10cm前後である。



第31図 洗場遺構実測図(洗場 1)
(1/30)

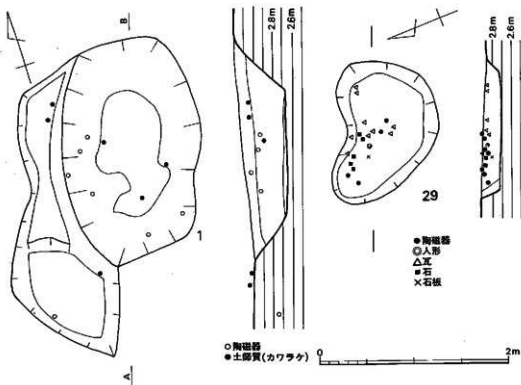


第32図 桶遺構実測図(桶 1、桶 2)(1/20)

- 洗場 2 (第27図、図版20) 洗場 1 の南側にあるもので、大きさは 1 号と同じ。
- 洗場 3 (第27図、図版20) 洗場 1 の西側にあるもので、大きさは洗場 1 と同じぐらい。
- 洗場 4 (第27図、図版20) 洗場 3 の西側にあつて、立ち退いた家の中にある。セメントだけ残っている。
- 洗場 5 (第27図、図版20) 洗場 4 の北側にあつて、大きさは洗場 1 と同じぐらい。
- 洗場 6 (第27図、図版20) 洗場 7 に切られているもので、セメントをはずすとほぼ前者と同じである。
- 洗場 7 (第27図、図版20) 洗場 6 の横にあつて、規模は前者と同じ、完全にセメントを剥いでみた。
- 洗場 8 (第27図、図版20) 洗場 6 の東側にあるもので、規模は一まわり小さい。井戸に近いのでトイレとは相違する。

埋設された桶 (第27・32図、図版22・23)

埋設された桶が 2 ヶ所検出した。旧家屋の中にあつたものと、推定されるもので東側を 1 号



第33図 土坑遺構実測図(Pit 1・Pit29) (1/40)

と西側を2号とした。2号は洗場1に切られている。

桶1 (第32図、図版22) 石臼が中にはいついたもので、漬物の桶と使用されたものと考えられる。

桶2 (第32図、図版23) 桶の中に鉄鋤と鉄輪がはいつているもので、洗い桶として使用されていたものである。平面形は円形を呈し、直径1.50mで、まん中に直径90cmの桶がはいつていた。桶の残存高は50cmで、底板まで40cmである。底板の厚さは5cmで頑丈なつくりである。

溝状遺構 (第27図、図版20)

II区の溝状遺構は、9本ある。M1～M9まで表示する。

溝1・溝2 (第27図、図版20) 春日神社の参道の地割の排水路である。東西方向へ流れている。

溝3～溝9 (第27図、図版20) 旧家屋の雨落ちの溝と思われるものである。断面はU字をなすものである。

建物基礎 (第27図、図版20)

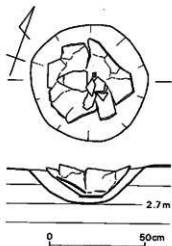
礎石をもって基礎としたもので、一世代前の旧家屋の礎石である。付図がこれである。結んで線を入れてみた。この礎石との間にカマドの遺構も残っており、これが炊事場であり、井戸もすぐそばにある。大正期の建てたものが、pit94の南東に焼土がたまった場所の土塚があった。これも家屋に伴うものか不明である。

土塚 (第27図、図版20)

pit29とpit1、カメ1を土塚としてここでは上げる。小さな柱穴群もあり、またゴミ穴として掘られたものもある。トイレも土塚の中にはいるが、これを除いた。これについては後で説明を付加することとした。

柱穴群はまとまらないがほぼ西端部の遺跡に面したところに集中している。旧家屋に付随するものや、それ以前の近世末に掘られたものがあり、遺物として近世陶器も多くみられている。

pit1 (第27図、図版20) 不整形を呈するもので、近代の陶磁器を検出した。出土状態は、床面より浮いた状態である。第27図はその分布状態を表現したものである。ごみ穴かもしれない。



第34図 埋藏遺構実測図(壘1)
(1/20)

pit29 (第27図、図版20) 不整形を呈するもので、近代の陶磁器はや石板等が出土している。その分布からみると、床面から浮いた状態であることを考慮してもゴミ穴状のものである。

甕1 (第27・34図、図版20) 平面形は円形を呈し、ほぼ真中に甕の底を検出した。pit40のそばに位置するもので、直径40cm、器高20cmが残っていた。ほぼ底部の部分であった。

トイレ (第27図、図版20) 汲み取り式のトイレを3ヶ所確認している。一時代前の建物に付属するものである。第4図を参照されると立ち退いた家との関係から理解できるものであった。

註

註 井戸の分類については、宇野隆夫「井戸考」【史林】65-5、1982を使用した。

出土遺物 (第35～63図、図版27～42)

ここでは、遺物を一括して説明することにした。遺構ごとに分け、器種ごとに分類すべきであったが、時代ごとにまとめた。

器種分類を行なったので、古い順から説明することにする。

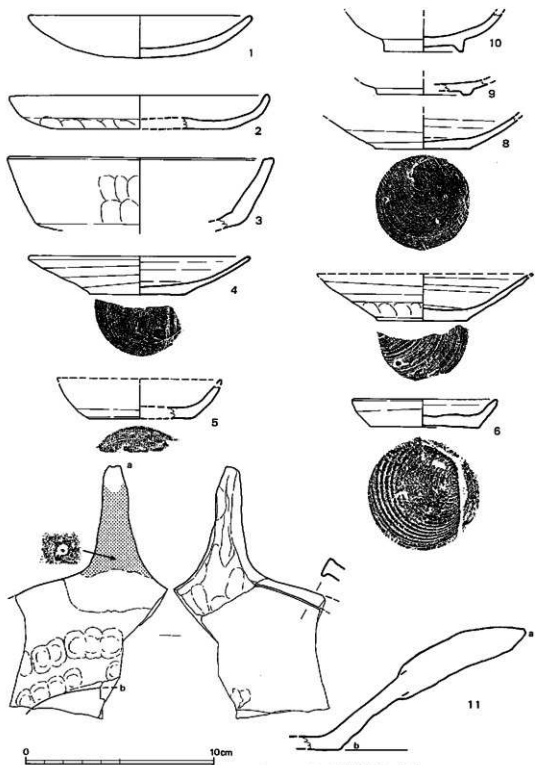
なお、A区とC区では遺構にともなって近・現代のものについては若干の説明を加えたので省く。この遺跡は中世のものがメインであるから、それを中心に説明をはじめ。最後に出土地点の一覧表をつける。(表2参照)

日常雑器 (第35～45図、図版27～37)

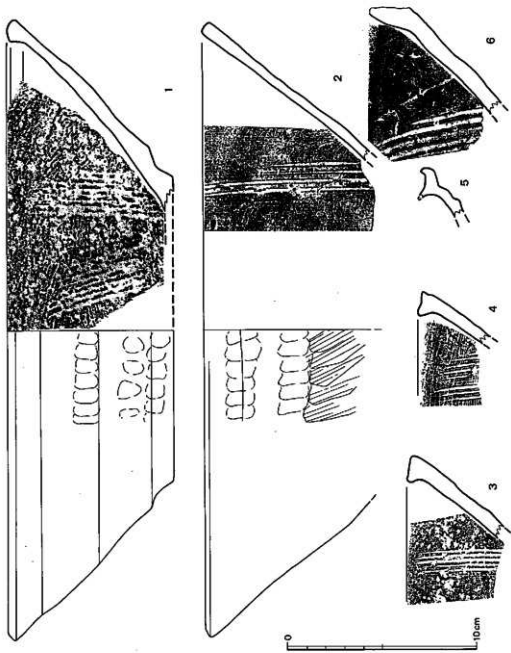
中世の日常雑器は土師器の皿・瓦器・甕・火舎(火鉢)・灯明皿・風炉・摺鉢・足釜(脚付の釜)・土鍋・焙烙・茶釜・椀形土器・貿易陶磁器等に分類できる。

皿(第35図①～⑥図版27・29) 土師質のもので、底が丸底になっているものと糸切り底になるものと二分される。大形のもの、小形のものと同種あるもので、③は大形のもので、B区の井戸3から出土している。口唇は一段へら削りされている。内面にススが付着しているため灯明皿として使用されている。⑤は貿易陶磁器の高麗青磁と共伴して出ているもので、底部は糸切り痕である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色、焼成は良好である。ススの付着はみられない。灯明皿として使用されたものは①・③・⑦・⑧で時期差は若干あるが、15～16世紀の範囲内にはいる。

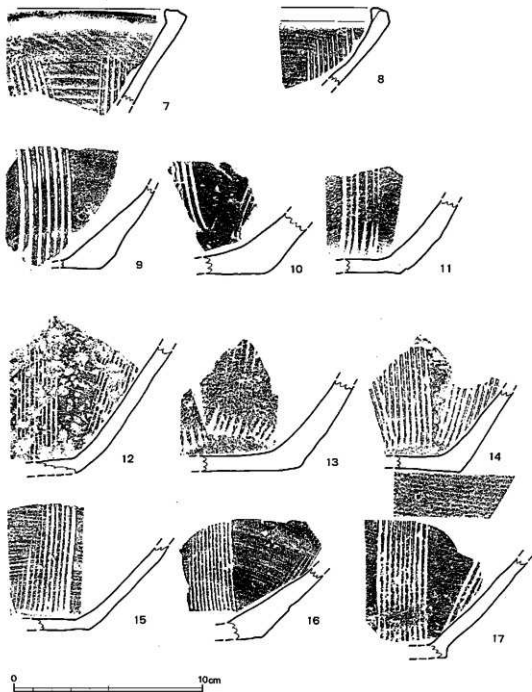
椀形土器(第35図⑨・⑩図版29) ⑨は高台の部分のもので、B区のpit58-①から出土したものである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色、焼成はあまりよくない。⑩は底部付近のもので、内外にススが付着している。高台内面まで広がっている。胎土には細粒砂を含み、色調は灰褐色で、焼成は軟質である。



第35图 出土遗物实测图 ① (皿・碗・焙烙他) (1/2)



第36図 出土遺物実測図 ② (スリ鉢 1)(1/2)

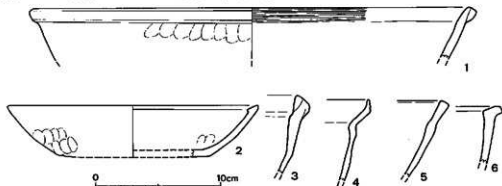


第37図 出土遺物実測図 ③ (スリ鉢2)(1/2)

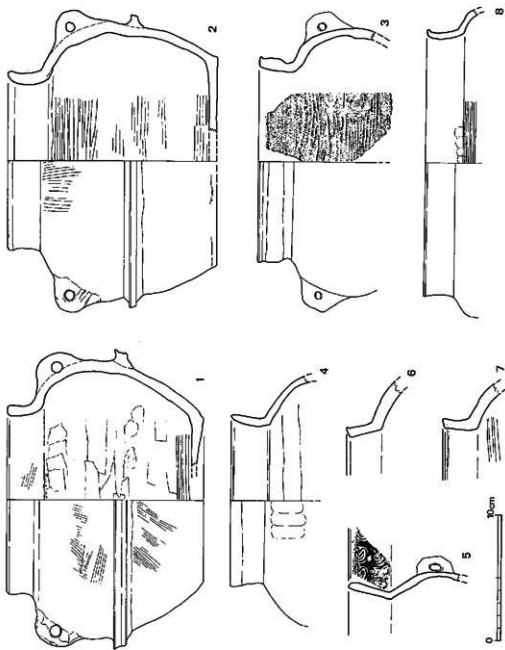
焙烙 (第35図-⑩、図版36) 豆や胡麻を煎るもので、土製のもので、把手の部分から底まで一部分である。B区井戸3付近から出土したものである。

スリ鉢 (第36・37図、図版30) ①～⑧までは口縁部の破片である。⑨～⑰は底部破片である。瓦器質のもので、焼成の硬軟がある。①は全体が理解できるもの、7本のスリ目をもつもので、口縁内部には三角凸帯を有している。B区の第2層・中世層より出土した。胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、内面は灰色を呈し、焼成は良好である。外面は指圧痕が残っている。口縁部は③・④・⑦・⑧が同じ形態である。②の口縁に凸帯を有せず、内面にスリ目は4本をもち、外面の胴部下半をヘラにて調整しているもの、指圧痕が残っているヨコナデである。⑦は典型的な瓦器質のものである。⑤は口縁に受け部をもうけたもので、胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、陶器質である。⑥も胎土に砂を含み、色調は赤褐色で、焼成は硬質で焼き締められている。口唇部直下には三段の凸帯を施している。一部にススが付着している。⑤・⑥は若干新しい時期になる。⑨～⑰は底部破片で、平底を有しているもので、厚手のものと薄手のものとに分類できる。薄手のものはこね鉢か。スリ鉢の中にも大小がある。⑨・⑱・⑲は焼き締めのもの、⑲は底部に板目が残り、胴部下半と底部に一部クシ目が残っている。スリ目のクシの本数が相異なる。概略的には胎土に細粒砂を多く含み、色調は赤褐色から灰色ないしは黒色に近くなっている。焼成は軟・硬がある。焼き締めのものもある。

土鍋 (第38図、図版36) 口縁部の破片が主である。鍋には深鍋・浅鍋・焙烙鍋と大約的に分類した。①・③・④・⑥は深鍋で、⑤は浅鍋、②は焙烙鍋とした。一般的に①と⑥のタイプがこの期に多い。①と③はB区の井戸3から出土したものである。①は胎土に細粒砂を含み、色調は黒灰色で、焼成は良好、外にススが付着している。②は胎土に細粒砂を含み、色調は黒灰色でススが付着している。内面は灰色を呈し、瓦質土器である。器面の調整はナデ仕上げで、指圧痕が残っている。③は器面にススが付着している。④は2次火勢を受けている。⑤も同じ器面にススの付着がみられている。④・⑤は同じpit101から出土したものの。



第38図 出土遺物実測図 ④ (土鍋) (1/3)

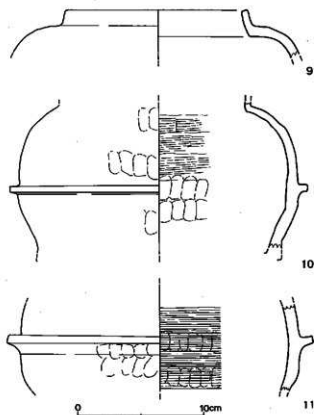


第39図 出土遺物実測図 ⑤ (茶蓋1)(1/3)

茶蓋 (第39・40図、図版27・31・32)

①と②は全体の器形がわかるもので、鉄製の茶湯蓋を写したものである。いわゆる真形のも

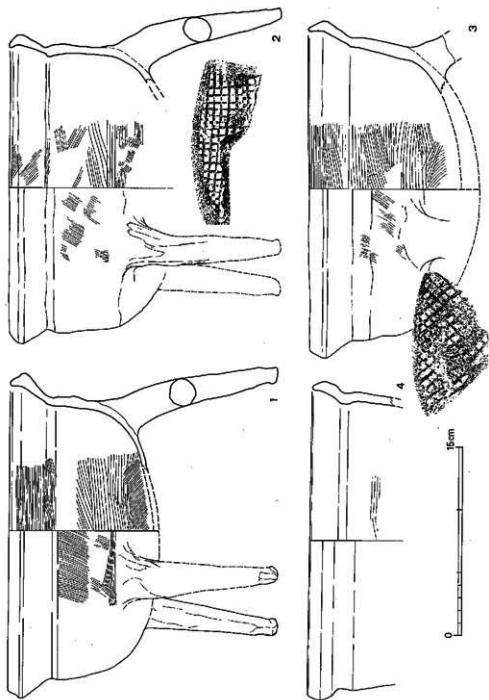
のの模造である。器形的には①と②は相異なる。この場合若干の新旧差がでてくるものと考えられる。口と肩の造りは似ているが、羽(脚)の感じが若干相異なる。底部は、①が丸底気味の上り底をなしている。②は平底で、重厚な感じを持つ。①と②とは銀付の位置が異なる。①は第21図の様にB区土壇から出土したもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰色から黒灰色であり、火があたった場所は黒変して、ススの付着がみられる。火勢を受けているため赤味を帯びて変色している。相当使用されたものである。焼成は良好である。銀付はシンプルである。②はB区の溝1から出土したもので、口の造りは指でなでて、上げ気味、肩の直下に銀付を造っ



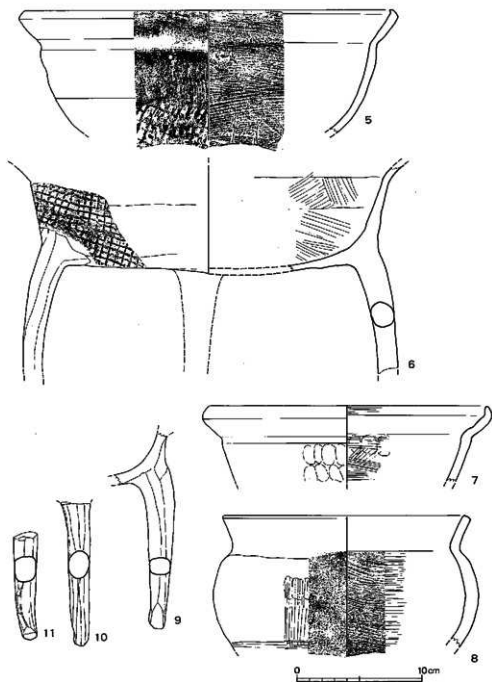
第40図 出土遺物実測図 ⑥(茶釜 2)(1/3)

ている。胴部最大径に銀付がつき、その下に羽(脚)が位置している。胎土に細小粒を含み、色調は黒色から黒灰色で、ススの付着は銀付以下にみられ、羽の下は1mm前後のススの付着がある。相当の時間使用されているものである。③～⑨までは口縁部の破片である。③と⑤は銀付までの破片である。⑤にはスタンプが施文されている。⑨は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、精良なる粘土を使用する。色調は赤味を帯びた黄褐色で、瓦質土器である。焼成は良好である。⑩・⑪は羽の部分を中心としたもので、羽から下にはススが付着している。よく使用された釜である。⑩は②と同じ器形で、平底となる。胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、いわゆる瓦質土器である。⑪も胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、内面は灰色で、焼成は良好である。

足釜(第41・42図、図版27・31) 土鍋に三本の脚が付いたもので、いわゆる鼎である。器形は口縁部が内湾し「く」の字状を呈しているもので、器高を低くして、底部を広くしている。①～④・⑦と⑤・⑧とに分類できる口造りの相異によってである。⑨・⑩・⑪は脚部分を一覽



第41图 出土文物实测图 ② (足盘 ①) (1/3)

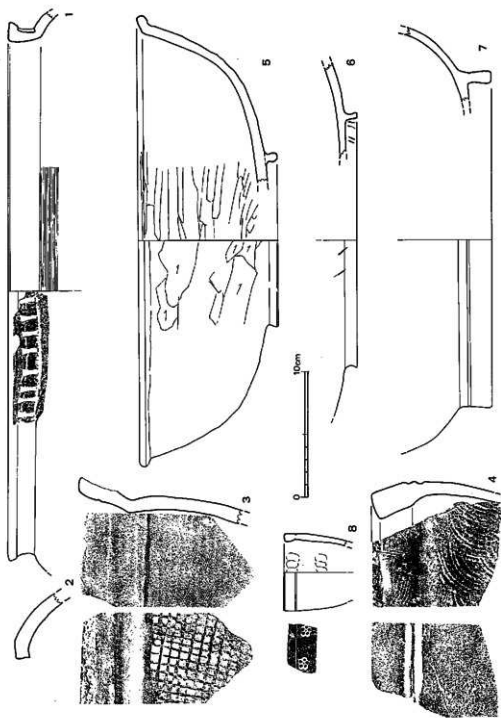


第42図 出土遺物実測図⑧(足釜②)(1/3)

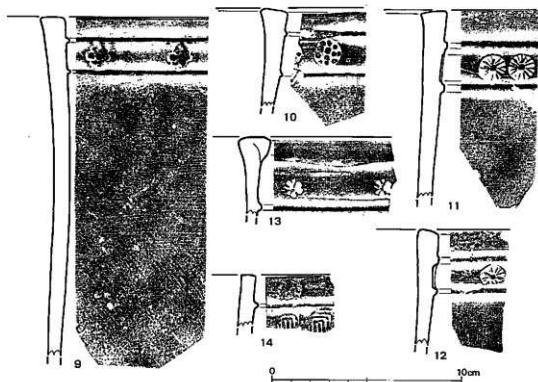
した。足の先の変化は三通りに分類されるものである。⑨は先を指先状に内立させたもの、⑩は指先状に直立させたもの、⑪は猫足状になったものにと細別される。

①はB区の土坑1から出土したもので口径が22.7~25.1cmの略楕円形をなしているもので、全体の器形が理解できる。いわゆる周防型の足釜である。胎土には細小砂粒を含み、色調は灰色で、ススが底から脚部上まで付着している。ススの付着をコントロールするために、格子目が押型されている。脚先から口までの器高21.4cmである。②も同様な器形である。B区pit83より出土したもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒灰色から暗灰色である。脚部の接続部下半から底部までは格子目が押型されている。ススの付着が多量にみられる。焼成は良好である。土師質に近い瓦質のものである。③は脚部が欠損しているもので、B区土坑2より出土した。胎土に細粒砂を含み、色調は暗灰色で、外面の格子目文の部分にはススの付着がみられる。器面の調整は外面はナアで、内面はハケメで仕上げている。④は口縁部の破片である。復元口径は24.5cmである。外面には広い範囲にススが付着している。⑦も前者と同じで、外面にススの付着が見られる。⑤・⑥は口縁の造りが相異なるもので、「く」の字ではなく、そのまま上がついて口となるものである。いわゆる口頸部が外反するものである。復元口径は前者が30cmで、後者が35cmである。脚部がつくもので、格子目文を有している。⑧は口頸部が外反するもので、茶湯釜とは若干異なるので、足釜の中に入れた。胎土に細粒砂を含み、色調は灰黒色である。焼成は良好で、中世の層から出土したもので、頸部以下にススの付着がみられる。⑨・⑩・⑪は脚の半分から以下にはススの付着は少く、また内側部分にはススの付着があまり見られない。これは何を、もの語っているのか？

火舎(鉢)・風炉・香炉(第43~45図、図版33・34) 暖房具を上げてみた。①は風炉の口縁部の破片で胴部以下に三葉文様の透かしが開けられているもので、B区の井戸3から出土している。口頸部に刺突文が施されている。②は口縁端部が内側に張り出すもの。II区pit19より出土したものである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰黒色、焼成は良好で硬質のもの。③は口縁部破片で、頸部から大きく外反している。玉縁状に曲がる部分が割れている。器面の調整は頸部以下に格子目文がタタキ出されている。内面はハケメで、内面にススの付着がみられる。B区の第2層から出土している。胎土に細粒砂を含み、色調は黒色を呈している瓦質土器である。焼成は良好。④はB区のpit24から出土したもので、口縁部破片で、二条の沈線有する。内湾した口縁である。胎土に細砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、焼成良好で、土師質のものである。器面の調整は、内頸部直下は同心円状のタタキを施している。頸部には指圧痕が残っている。①~④は火鉢としては深鉢のもの。⑤~⑦は浅鉢のものとした。⑤は復元口径は35.4cm、復元底径は13.8cmで、器高11.1cmである。胎土に細粒砂をやや含み、赤褐色粒や角閃石をも含んでいる。B区の土坑1号より茶釜と共伴したものである。色調は灰褐色で一部に橙黄色。高台外面に一部にスス付着が見られる。器面調整は内面はヘラミガキで外面はヘラケズリ後ナア

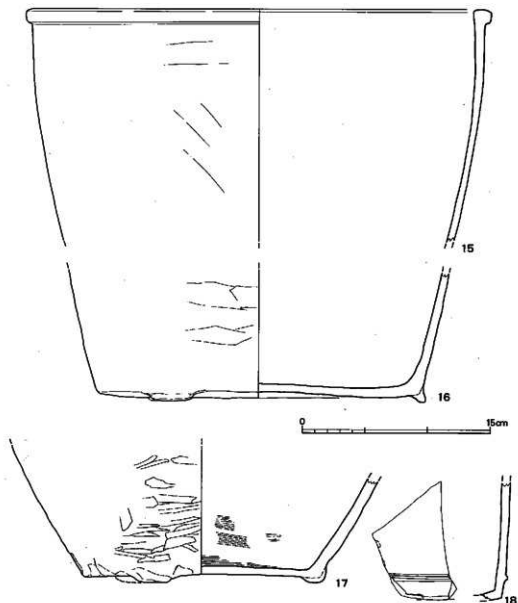


第43圖 出土遺物某圖⑨ (火鉢・風炉・香炉)(1/3)



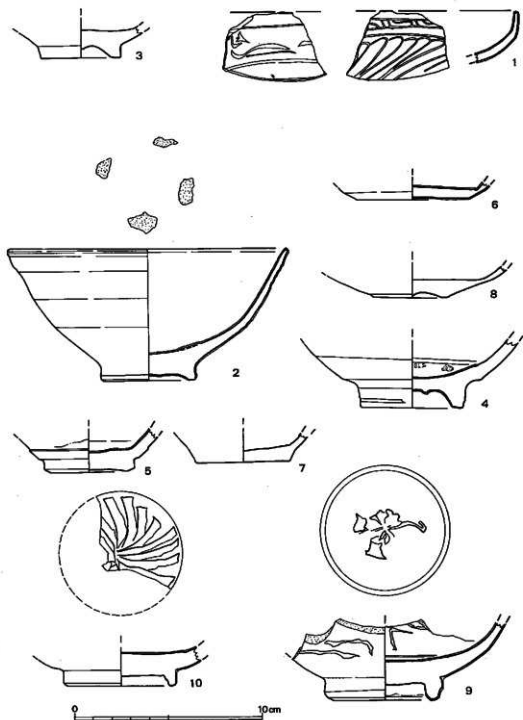
第44図 出土遺物実測図 ⑩ (火鉢 2) (1/2)

ている。⑥は高台部分のもので、II区の第2層より出土しているもので、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色、焼成は良好である。⑦はB区第2層の中世の層から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、濡ぶされた上でミガキ上げられている。焼成は良好である。⑧は直立した口縁部の破片で、器種は香炉である。外面にスタンプをもち、内外面スス付着している。口縁直下に沈線を一条施して、その下に菊花文のスタンプ文様をもっている。⑨～⑭まで深鉢形のもので、筒型を呈している。⑯～⑳はその底部のものである。⑨～⑭までは口縁部破片で、器外面に凸帯とスタンプ文をもっているものである。スタンプの文様は菊花文・梅花文・叢文・雷文等である。この中では菊花文が主体であった。⑭は2次火勢を受けて、スタンプは雷文である。⑨はB区のpit91から出土したもので、胎土に細砂を含み、色調は灰褐色である。二条の凸帯の間にスタンプの梅花文を施している瓦質土器。焼成は良好である。⑩はII区のpit12から出土したもので、胎土・焼成は⑨に同じで、スタンプは叢文で、二条の凸帯の間にある。⑪はB区のpit102から出土したもので、二条の凸帯の間にスタンプの菊花文が施されている。胎土・焼成は前者に同じで、色調は外面は黒褐色、内面は黄褐色である。⑫はB区の第2層の中世の層から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色を呈し、二条の凸帯の間に菊花文をスタンプしている。焼成は良好である。⑬は口縁部が玉縁状になったもので、その直下に一条の凸帯を有している。B区のpit72で出土したものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黒色を呈し、凸帯の上面にスタンプの上に梅花文を施している。⑭はB区の第2層の中世の層から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、2次火勢を受けて、色調は黄褐色である。一条の凸帯文の上部に雷文を施している。⑮はB区pit63から出土したもので、胎土には砂粒を全んど



第45図 出土物実測図 ① (火鉢3) (1/3)

含まない精良な粘土である。色調は灰色で、焼成は良好。復元口径は35.7cmである。⑮はB区のpit8で出土したもので、胎土には精良なる粘土を使用している。復元底径は25.9cmで、低い脚を三ヶ所にもっている。色調は灰色を呈している。⑯はA区のpit136で、復元底径19.2cmで、低い脚は3ヶ所つくったもので、1ヶ所は残って、他の1ヶ所はその痕跡がある。胎土には細小砂粒を多量に含む。色調は黒灰色を呈する。⑰はB区のpit52から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒灰色である。焼成は良好である。



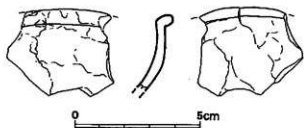
第46图 出土遺物実測図 ⑫ (貿易陶磁器)(1/2)

貿易陶磁器（第46図、図版37）①は李朝前期の青磁象嵌文の皿の口縁部の破片が出土しているA区の第2層の中世の層で糸切り底の土師器や錢一枚（元祐通宝）とが共に出土しているもので、内面の文様は黒色、白色に発色している。外面は白色に発色している。白・黒に発色させた部分には化粧土を入れて象嵌としているもので、灰色かかった青味が全体に発色している。内面には一条線を入れて、その下の文様は雲文？を描いている。外面は二種類の連続文を象嵌している。②も李朝のもので白磁である。口径14.6cm、底径4.9cm、器高7cmで胎土は精良なる粘土で、白釉に発色している。砂目跡が4ヶ所にある。A区のPit2出土のもの。高台の畳付けは釉がかかってない。高台に特長がある。③・④・⑤は高台の部分である。③の出土地点はB区の第2層の中世の層から出土したもので、土灰釉を掛て、畳付けの内面までかかっている。砂目痕跡が残って、見込にも砂目が残っている。茶碗の高台破片、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は鼠色、発色は白色に発色した胎胎部分がある。いわゆる粉引茶碗である。④はB区のPit31から出土したもので、李朝の陶器で、粉引茶碗である。胎土は細粒砂を含む粘土を使用し、色調は鼠色に近い灰色で、見込に砂目が5ヶ所見られる。畳付にも砂目がみられる。⑤は天目茶碗の破片で、釉調は黒釉を掛けているもので、外面にも同系統の色が見える。土見をもった姿をしていたものと思われる。胎土には精良なる粘土を使用し、粘土の色調は黄褐色で、焼成は良好である。中国製のものと思われる。⑥・⑦は白磁の皿で、福建省の同安窯のもの底部である。前者はA区の2層の中世の層から出土して、後者はB区のPit79から出土している。同系統のものである。後者が若干厚手のものである。⑧は李朝の陶器の小皿の底部で、A区のPit107から出土しているものである。底の造りは萁筒底をなしている。3ヶ所に砂目を置き、見込にも3ヶ所の砂目残り、高台の痕跡が付いている。焼成は良好で、磁器化している。いわゆる半陶半磁である。トンボの位置も残っているもので本当に雑につくっている。胎土は精良なるもので、釉調は草色に発色しているが、灰釉である。⑨・⑩は中国製の青磁で竜泉窯系碗形のものである。出土地点はII区の第2層の中世の層から出土したものである。前者には見込に花文様が彫文されて、内外面に彫文があるもの。後者は見込の部分に抽象化された花文様、すなわち中心に向けて放射状に文様を付している。釉調は、⑨が草色で、⑩は青白色を呈している。時期的には13世紀後半から14世紀頃のものである。一時期古いものである。

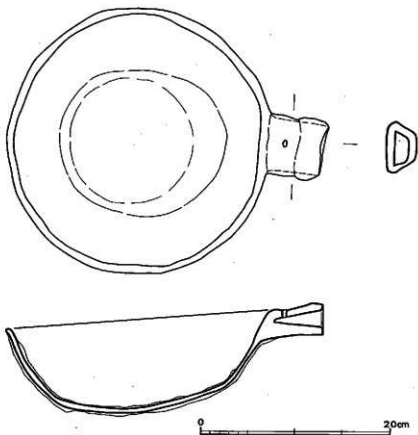
この他に細身の蓮弁を彫文した竜泉窯系の青磁の口縁の小破片が出土している。（図版37）15世紀前半期のものである。

ガラス（第47図、図版37）B区の第2層で中世の土層から出土したもので、風化しているため、この時期のものと考えた。黄味を帯びたもので、口唇部が玉縁状になっている。外面は風化して細い剝離がはいつているもので、その剝離面の表面は風化して白色となっている。

中世のガラス製品は福岡市教委の博多遺跡群の調査で検出されている。博多築港線1次の調査では、ガラスの工房跡が検出されている。埴塙や玉・盤等の破片が出土している。

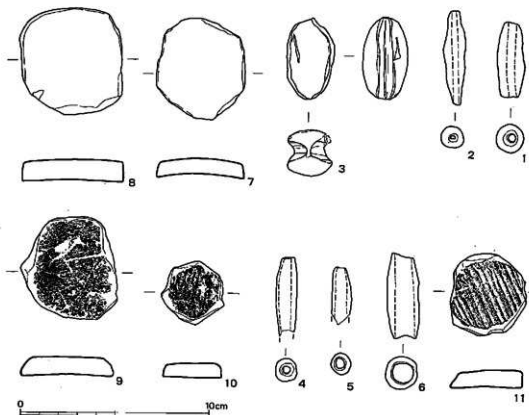


第47図 出土遺物実測図 ㉓
(ガラス)(2/3)



第48図 出土遺物実測図 ㉔ (とり瓶)(1/4)

とり瓶(第48図 図版38) B区の井戸3号付近より出土している鉄製のもので、口径28cmで、深さ9.6cmで把手をもち、その把手に木柄をつけたものである。木を固定するための留孔がある。時期は不明で、銚の具台から中世期のものと考えたい。銚物関係の遺物と思われる。

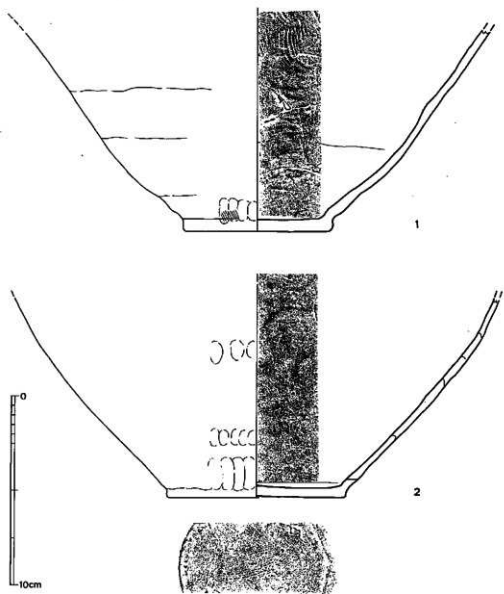


第49図 出土遺物実測図 ⑮ (漁具・土製円盤) (1/2)

漁具 (第49図、図版38) ①～⑥は網の錘になったものである。③は滑車式の土錘である。B区の4号土塚墓から出土したもので、胎土に小砂を多く含み、色調は赤褐色で、焼成は良好で、一部欠損している。重量は28.4gである。①・②・④・⑤・⑥は管式のものである。①・②はB区から出土しているもので、重量は前者が6.8g・後者が5.9gである。⑥はII区東端のPit33から検出されたもので、重量13.6gである。

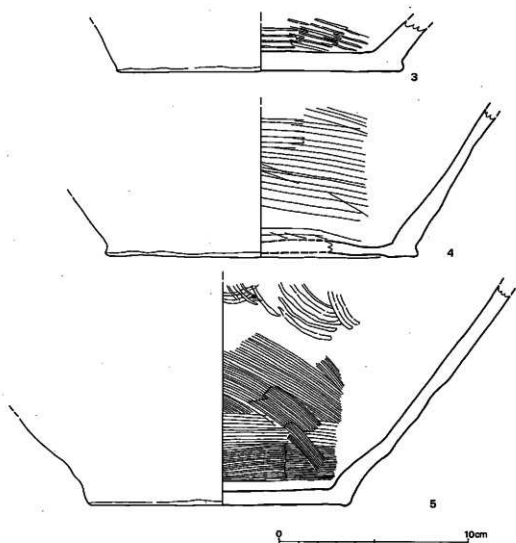
土製円盤 (第49図、図版38) ⑦～⑪で通称メンコと称しているもので、側縁部を磨いているものである。その使用方法についてはいろいろと説があるが、遊戯具としての可能性がある。各地区より出土している。

甕 (第50・51・52図、図版28) 全て瓦質のものである。時期的には中世期のものが大半と思われるが、時期の決め手にかける。①はII区のカメ1として取上げたもので、胴部下半から底部にかけてのものである。製作技術は底部付近のものを後に付けている。内面の調整は円形のアテ具を使用している。外面は剝落して不明、②もII区のカメ2として取上げたもので、内面の調整に円形のアテ具を使用している。一部赤変しているところもある。底部は円盤貼付けで



第50図 出土遺物実測図 ⑤(甕1)(1/2)

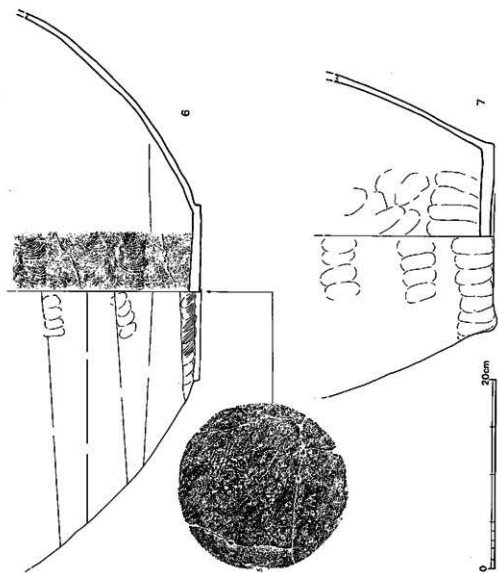
ある。③・④はII区のPit17から出土しているもので、春日神社の御溝から切られている。製作技法は中世の火鉢の作り方と同じである。胎土には砂を多量に含んだ粘土を使用している、タタキながら内面を調整している。⑤はB区の井戸6の付近から出土したもので、中世の火鉢等も出土している。胎土に細小砂を含み、色調は、内面が淡茶褐色で、外面は褐灰色を呈してい



第51図 出土遺物実測図 ⑩ (甕2)(1/2)

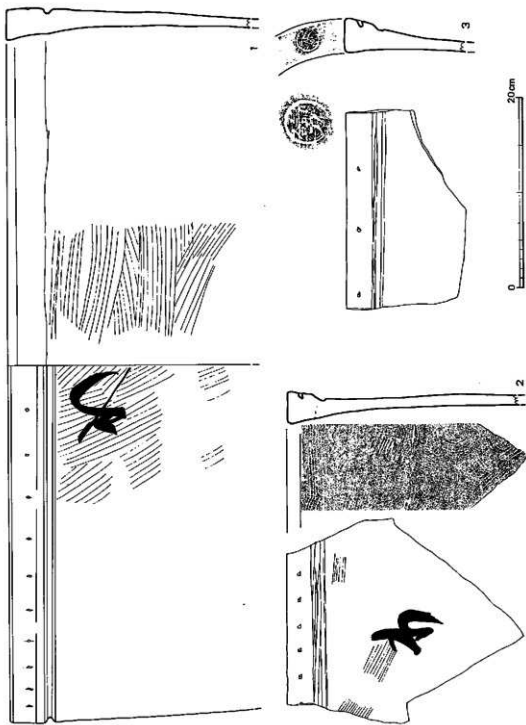
る。製作技法は中世の火鉢と同じである。⑥は大形のもので、B区の第2層の中世の面でカメ4として取上げているものである。胎土に細砂を含み、色調は灰褐色で一部に赤味を帯びている。内面の調整は同心円状の円形のアテ具を使用している。内底付近には指圧痕の上からカキメを施している。底部には糊との痕跡が残っている。⑦は前述している。

井戸枠 (第53・54図、図版35) 陶管製の井戸は金屋遺跡からは4基出土している。その中でも、II区の井戸Iを詳細に調査した。陶管が8段も連結しているものである。時期的には明治から大正期までのものと考えられる。この陶管には墨書や製作所の印が押圧されている。③は

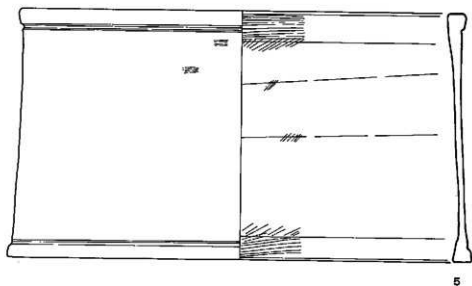
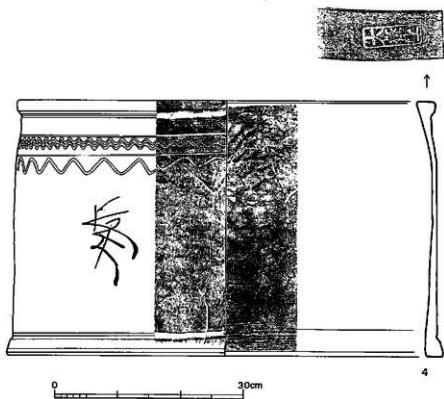


第52図 出土遺物実測図 ⑤ (號3)(1/4)

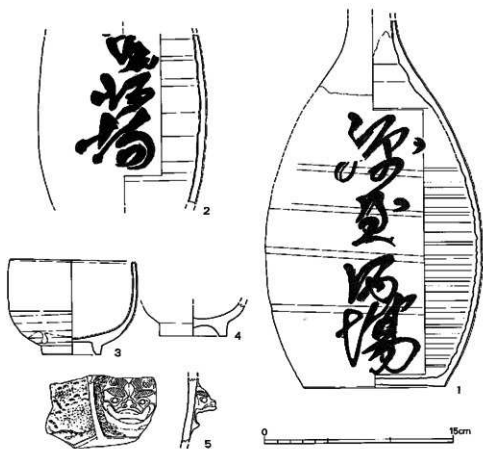
井戸桁として使用されたものがⅡ区の土坑1から出土したものである。口唇部に印が押印されている。合力譜と読める。胎土・色調・焼成は同一のもので、大量生産された陶管で、一般的土管厩が製作している。素焼のものである。宇野隆夫氏の分類(註1)では土管組にはいるものである。①・②・④には墨書が書かれている。①・②は水の異体字である。④には上条と読める。井戸掘職人の名前か。⑤は典型的な杵のみを実測図で示めた。④には筋りがあるが、他にはない。①は6段目の口縁部、②は5段目の口縁部、④は最下段のものである。⑤は3段目のも



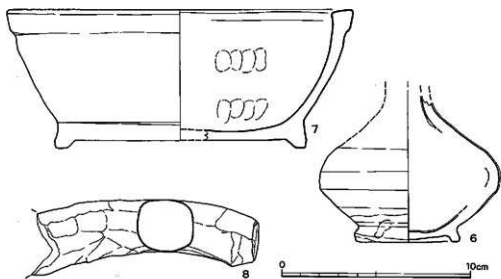
第53图 出土遺物実測図 (伊戸仲1)(1/4)



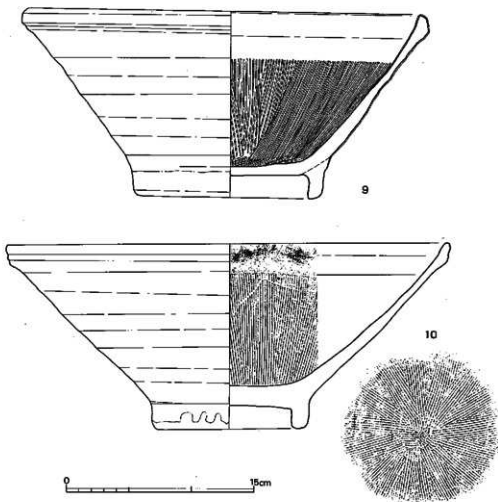
第54圖 出土遺物実測図 ㊸ (井戸梓2)(1/6)



第55圖 出土遺物実測図 ㊸ (陶磁器類 1)(1/3)



第56圖 出土遺物実測図 ㊹ (陶磁器類 2)(1/2)



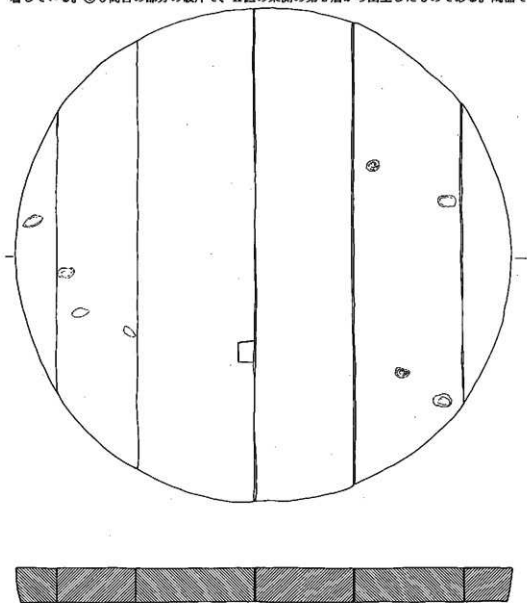
第57図 出土遺物実測図 ㊸ (陶磁器類 3 スリ鉢)(1/3)

のである。⑤は胎土に細粒砂を含み、色調は素焼きのため黄褐色を呈し、焼成は良好である。両端の口縁直下に一条の沈線をもっている。④には頸部に波状の襷描がかかっている。

なお口径の大きい方が一般的に上と考えられる。以上のことから陶管は組合せて使用されるわけで、接着剤としては、しっくいかセメントを使用することになる。口唇部はそのために雑になっている。

陶磁器類 (第55～57図、図版35・40・41) 多くの近世・近代の陶磁器が検出されている。その中で興味を引くものを取り上げた。肥前系の陶磁器については、写真を中心としたので了承されたい。①は一弁徳利で、いわゆる通い徳利である。②五合徳利で、これも通い徳利である。

酒場は読めるが上字は欠けて読めない。③京焼風の陶器である。胎土には精良な粘土を使い、色調は黄橙色で、釉調は透明釉である。細い貫入がある。口径9.8cm、底径4.5cm、器高7.6cmで、土見が残っているもので、B区Pit24から出土したものである。見込みに焼成時のゴミが付着している。④も高台の部分の破片で、II区の東側の第2層から出土したものである。陶器で

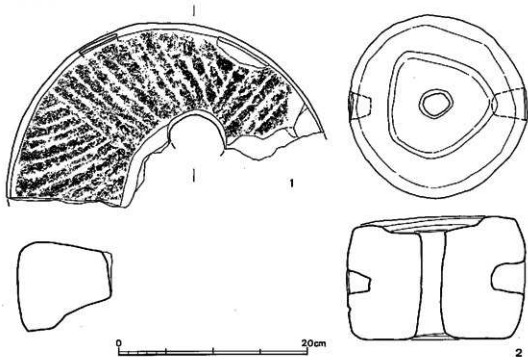


第58図 出土遺物実測図 ㊸ (桶底板) (1/6)

高台内面まで、藁灰釉がかかっている。⑤は風炉の一部で、II区の中央部の2層より出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒色、焼成は大変よい陶器で、板東寺焼の風炉と思われるもので、大正期のものと考えたい。六角形のもので、六面に動植物が押画的に彫れている。その二面が破片であるが理解できる。一面は唐獅子と松の絵である。⑥は油瓶でII区Pit75より出土したもので、江戸後期の所産である。口縁部付近は欠損している。胎土に細粒砂を含み、釉調は緑褐色で一部にナマコ色に発色している。釉は土灰釉を使用していたもので、風化して白ぼくなっている。陶器で、土味から上野系と思われる。⑦は焙烙の鍋で、II区のPit1から出土しているもので、把手がつくものと考えられる。素焼の物である。⑧は焙烙の把手で、A区の建6の溝の中より出土している。良く使い込まれているものである。

スリ鉢（第57図、図版38）⑨・⑩は近代のもので、昭和の始めのものと考えられる。⑨はII区のPit1からの出土しているものである。口径31.3cm、器高が14.9cmで、底径が13.2cmである。⑩はA区の建物5溝より出土したもので、現代に近いものである。両者とも典型的なものである。スリ目の数が相違する。

その他の近世陶磁器（図版40・41）肥前系のものが多く、江戸後期のくらわんか手のものや、こんにゃく判手、明治期のプリント判手まである。いわゆる染付の小皿や茶碗である。有田・波佐見及び三河内のものがみられている。筑前系の染付けも若干含まれているが、肥前系が主



第59図 出土遺物実測図 ⑤(石白)(1/4)

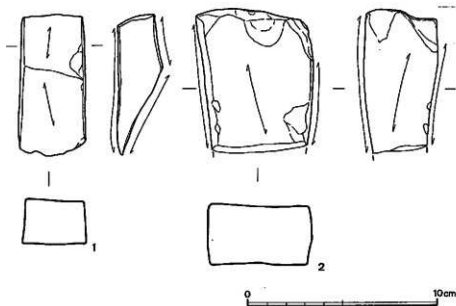
である。

桶（第58図、図版38）Ⅱ区の桶2の底板である。洗い桶とされていたもので、材は杉材で板目である。板の接ぎには竹釘を使用している。厚さは5cmで、左から3枚の下には施木を入れている。節か虫喰があったものと思われる。

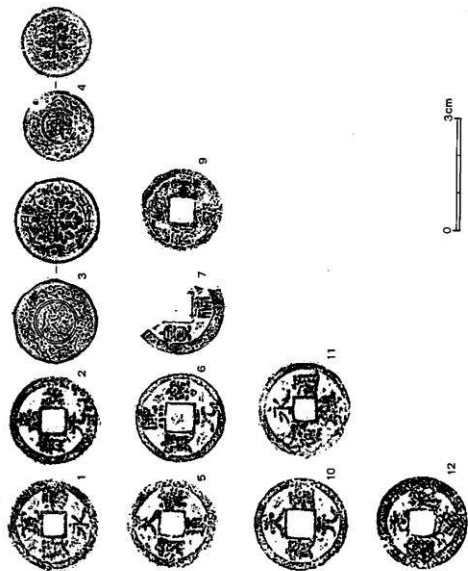
石臼（第59図、図版42）①は粉食にする大豆等を挽いたものである。側方打込み式のもので上下の臼の目は「挽き割」といって、荒砕きするものと細かく粉砕するものとは目の形が違うが、パターンはだいたい同じである。上臼の方で目は5分画であった。石材は熔結凝灰岩である。Ⅱ区の桶1の中より出土している漬物石として転用されている。②は上臼で、小型のもので側方打込み式の石臼である。Ⅱ区の第1層より出土している。江戸後期から昭和のはじめまでの間に使用されたもの。細かく粉砕されるものと考えられる。石材は硬質砂岩である。

砥石（第60図、図版42）2点検出したもので、①はⅡ区の洗場9から出土している。よく使用されたもので、表裏両側縁部まで使用されている。重量29.2g。石材は天草石である。②はⅡ区の柱穴1より出土したもので、石材は硬質砂岩である。表裏両側縁部まで使用されている。いわゆる荒砥である。時期は江戸末から明治。重量327g。

貨幣（第61図、図版39）出土した貨幣は13点であった。それを一覧すると、次の様になる。新しいものは大正年間のもの五厘・一銭硬貨である。



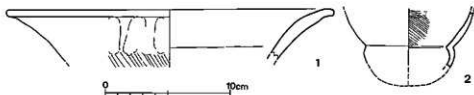
第60図 出土遺物実測図 ②(砥石)(1/2)



第61图 出土文物类测图(貨幣)

A地区	①寛永通宝(表土層)	②嘉祐元宝(第2層中世層床)
	③一銭銅貨(大正十二年)(表土層)	④五厘銅貨(大正八年)(建3溝)
	⑤天禧通宝(第2層中世層床面)	⑥熙寧元宝(第2層中世層床)
	⑦元祐通宝(第2層中世層床)	⑧不明(読めず)(第2層中央部床)
	⑨寛永通宝(表土層)	
B地区	⑩大聖元宝(3号住居跡)	⑪永楽通宝(Pit104)
C地区	⑫元祐通宝(P-1覆土中)	

宋銭・明銭が多く見られ、江戸期の分は寛永通宝2枚と大正期の2枚であった。元聖元宝が住居跡の床面近くから出土したことである。



第62図 出土遺物実測図 ㊸(古墳時代土器)(1/3)

古墳時代の遺物(第62・63図、図版38)古墳時代の遺物も検出されている。流れ込みの状態と考えられるが、甕の口縁部破片と小型丸底壺であった。それとガラスの丸玉1点出土していた。

甕(第62図-①)口縁部の小破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、ローリングを受けている。焼成は良好である。B区西端から出土。

壺(第62図-②)小型丸底壺の口縁部付近の破片である。C区のPit15からで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で赤味を帯びる。内面は褐色で、焼成は良好である。

丸玉(第63図)B区の中世の層より出土したもので、色はコバルトブルーで気泡ははいっているため一見みると文様のように見える。



第63図 出土遺物実測図 ㊹(玉)(1/1)

註

註1 宇野隆夫「井戸考」『史林』65-5 1982の研究の他、田村栄太郎「井戸掘りと桶職人」『日本職人技術文化史(下)』1984がある。

また河内一浩が「近世井戸について」『近世都市の構造』関西近世考古学研究会大会の発表要旨 1991等がある。

表2 金屋出土遺物一覧表

第5図	①表土②試掘③表土④A区表採
第8図	A区土瓶1
第9図	①A区建2 溝No.13②A区pit117③A区pit117④A区pit117⑤A区表土⑥A区建5 北溝No.2⑦A区建5⑧A区建5⑨A区建5 北溝2
第13図	A区pit109③
第25図	C区M1
第26図	C区pit D
第35図	①A区井戸3号②2区pits50③B区井戸3号(石組)④B区pit A⑤A区住居跡⑥B区B-1第2層⑦B区pit31⑧B区井戸3号(石組)⑨B区pit58-1⑩B区pit58-1⑪B区E-1第2層
第36図	①B区B-2第2層②B区A~A'pit C③B区C-1第2層④2区C-4第2層⑤B区pit24⑥B区D-1第2層
第37図	⑦B区P-29第2層⑧B区pit36⑨C区北第2層⑩C区北第2層⑪B区pit97⑫B区pit98⑬B区E北側第2層⑭2区pit56⑮B区M1一括⑯B区pit11⑰B区pit79
第38図	①B区井戸3号(石組)②B区P89③B区井戸3号(石組)④B区pit101⑤B区pit101⑥B区第12層
第39図	①B区茶釜1 土器-3②B区M1③B区pit100④B区P17⑤B区pit83-1⑥B区M1一括⑦B区第2層井戸付近⑧B区北側第2層
第40図	⑨B区pit52一括⑩B区A-1北第2層、B-1第2層⑪B区pit36
第41図	①B区A~A'pit A1~8②B区pit83~2・3・4 pit100③B区A~A'pit C④B区A~A'pit D
第42図	⑤B区B-1第2層⑥B区A~A'pit 1-8⑦B区pit46⑧B区C-1第2層⑨B区A~A'pit C⑩A区M南⑪B区4号D世No.2
第43図	①B区井戸3号(石組)②2区P19③B区B-1第2層④B区pit24⑤B区茶釜1、土器1⑥2区B-5第2層⑦B区A~A'pit D⑧B区B-1第2層
第44図	⑨B区pit91⑩2区pit12⑪B区pit102⑫B区E-2第2層⑬B区pit72⑭B区第2層
第45図	⑮B区pit63-1⑯B区pit 8⑰A区pit136⑱B区P52
第46図	①A区住居跡②A区pit 2③B区C-1第2層④B区pit31⑤B区pit70-1⑥B区A北側第2層⑦B区pit79⑧A区pit107⑨2区第2層⑩2区中央部第2層
第47図	B区B北側第2層
第48図	B区井戸3(石組)
第49図	①B区P-1フク土②B区pit104③B区4号土壇墓④A区pit111⑤A区建2 溝No.7⑥2区東端ピット⑦B区井戸3号(石組)⑧B区P6⑨2区pit78⑩A区M1⑪B区E-2第2層
第50図	①2区壘1②2区壘2
第51図	③2区P17④2区P17⑤B区井戸6付近
第52図	⑥B区E-2⑦A区建4北溝
第53図	①2区井戸2(素焼)②2区井戸2(素焼)③2区D-1
第54図	④2区井戸2(素焼)⑤2区井戸2(素焼)
第55図	①A区建6 北溝No.3②B区P103③B区P24④2区東側第2層⑤2区中央部第2層
第56図	⑥2区pit75⑦2区pit 1 No.8⑧A区建6 No.8
第57図	⑨2区pit 1 No.6 No.9⑩A区建5 No.5
第58図	2区橋2
第59図	①2区橋1②B区表土
第60図	①2区洗9②2区柱穴1
第61図	A区-①~⑨ B区-⑩-⑬ C区-⑭
第62図	①B区D-2第2層②B区CP15
第63図	③B区第2層

IV. おわりに

前章までが、今回発掘調査を実施した金屋遺跡の内容である。この調査の成果と今後の課題を記して、おわりとしたい。

1. 金屋遺跡の歴史的背景

14世紀から15世紀にかけての、足利幕府の九州地方の統治は九州探題が中枢として機能していた。今川了俊の後任以後、足利一族の淡川氏が世襲した。政治力をもったものがなく、九州在地の有力者小武・大友・菊池等が無能探題に公然と反抗する有様であった。こんな状態であったため幕府は、中国の有力守護大内盛見を厚遇し、豊前国守護を与え、筑前国内の幕府御料所も預けて、探題淡川満直の後見を依頼した。大内氏は対鮮・対明貿易の推進のためには赤馬関・門司関だけでなく、博多を支配下におさめる必要を痛感していた。小武・大友のように九州支配の伝統をもたない大内氏にとって、九州探題の後見役は願ってもない仕事であった。大内盛見は家臣の陶氏を博多に駐在させ、門司関とともに対鮮・対明貿易の独占をはかろうとした。対馬を対鮮基地とした小武氏とはげしく対立することとなり、同じく博多湾岸に貿易基地をもつ大友氏も抵抗する結果となった。

永享3年(1431)7月、小武満貞・大友持直・菊池兼朝と戦った大内盛見が糸島郡萩原で戦死(萩原の乱)した。幕府に大きな衝撃を与えた。しかし、そのころ関東管領足利持氏謀反のうわさが伝わっていた。事態の取捨を急ぐ必要から九州の守護大名たちへ政治工作がはじまった。菊池兼朝に恩賞先渡しとして、筑後国守護職を与えて大友、小武を攻めさせた。また兼朝のところに亡命していた大友持直の甥親綱を豊後守護に任じて大友家の分裂を激化させた。この工作は効を奏し、永享5年(1433)小武満貞は秋月で大内持世にうたれ、大友持直は豊後国に出奔して行方不明となった。それにともなって中国(周防・長門)の大内氏が順調に九州に進出してきた。

大内氏の北九州制圧は在地の国人層に及ぶ。豊前では門司・長野・貫氏など、筑前では麻生氏などが被官になった。大内教弘の代には筑前・筑後のおさえ、家臣の陶弘房を筑前守護代として箱崎に仁保弘直を大宰府岩屋城に、杉興信を京都郡松山城に、陶美作を山門郡垂見城におき、有力な国人原田弘種・秋月種繁を被官として、それぞれ高祖城と秋月城に配置した。応仁の乱が起ると大内政弘が西軍の中心となり、京都にいたが、その虚について小武教頼は東軍に応じて筑前の回復をはかった。文明元年(1469)になると大友親繁も小武に同意して東軍にはいり、大内氏との抗争が激化して筑前・豊前で戦いが繰り返されたが、文明10年小武政資の敗北に終わった。これによって博多を分割支配していたが完全に大内氏に占領された。

大内氏は勘合符を保管して対明貿易を独占することになった。大内義隆の代になると、天文元年(1532)から小貳・大友の連合軍と戦い、天文5年には小貳資元を肥後に追つめて降伏させ翌々年の天文7年には筑前国の所領返還を条件に大友義隆と和平した。後奈良天皇即位の資を献じた功で先祖代々の宿願であった大宰大貳に補任され、さかんに「大府宣」を発行して北九州各地の社寺・武士たちに所領の安堵・相続の承認をおこなって大いにその權威付をした。

この年9月小貳資元は肥前多久城に殺され、資元の有力家臣であった龍造寺氏が大内氏から肥前代官に任命された。鎌倉以来の名門小貳氏はこうして歴史上から消滅した。

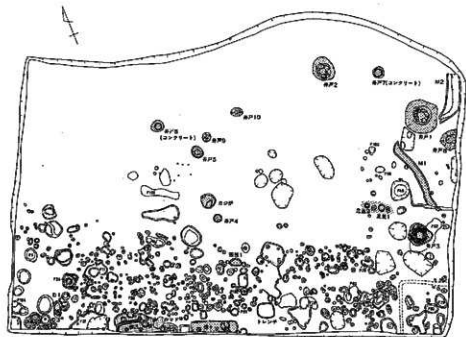
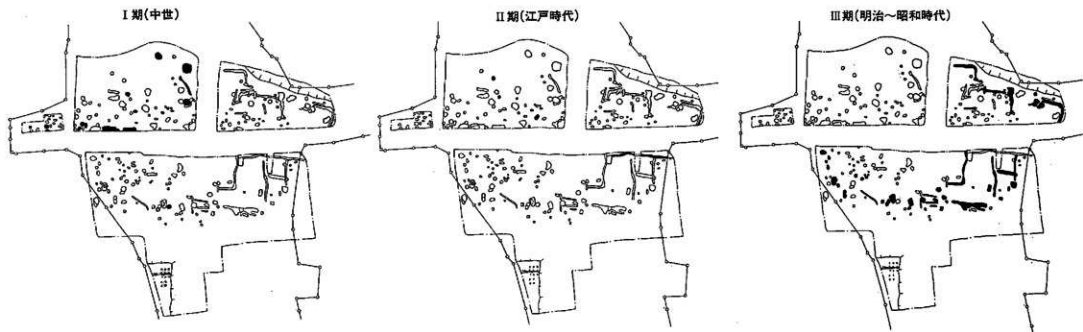
大内氏のその支配、豊前守護代に譜代杉氏、郡代には橋津(宇佐)・佐田(宇佐)・野仲(築城)・城井(築城)・広津(築城)など、段銭奉行(土地の面積に応じて臨時の租税をとりたてる)にも野中(下毛)・広津(築城)・山田(築城)・城井(築城)・如法寺(築城)・副田(田川)・伊川(企救)・貫(企救)等、いずれも豊前国内の土着国人たちが任命された。筑前・豊前の有力国人の多くは山口に屋敷を構え子息などが生活しており、一種の人質的な制約を加えられていた。「大内家壁書」によって領国支配の制度完成を示している。一方、筑後国には豊後の守護大友氏の支配下におかれ、大友氏はたくみな領国支配体制をしいていった。大友氏一門の豊前氏と土着の有力国人三原氏(原田氏一族)を組み合わせて守護代とし、その下に複数の郡代をおいている。郡代には筑後土着の国人(高一揆衆)と国衆とよばれる豊後の地侍をたくみに配置している。大友氏は筑前国にも糸島郡を中心に所領があり、怡土荘博多浜には庄政所をおき一門譜代の古庄氏や白杵氏を派遣した。のち白杵氏は怡土荘にあった柑子岳城督として、大友氏の筑前支配の一翼を担うようになった。

大内義隆の制圧以来、平穏であった北九州も天文20年(1551)9月、家臣陶隆房(晴賢)に攻められて自殺する変事が起こったのをきっかけに再び動乱の兆が現われ、粕屋の浜で筑前守護代杉興連が討たれ、相良武任の拠る北九州市八幡西区の花尾山城が陶軍に攻め落とされるなどの事件が続いた。陶隆房が、大友宗麟の弟晴英(義長)を大内家当主にたてたため激変は避けられたが弘治元年(1555)に陶隆房が毛利元就と厳島に戦って敗死、大内義長も自殺し、中国地方にも激動がはじまった。ここに中国の雄、大内氏は完全に歴史上から消えた。

この機に大友氏は北上を開始して、馬カ岳城(京都郡)に大内方被官の長野・野仲氏を破り、ついで博多を掌中におさめた。

永禄2年(1559)までに肥前・筑前・豊前を加えて六ヶ国の守護職を幕府に賄おくり、九州探題となり九州随一の大大名にのし上がった。中国平定を終った毛利元就が、その年秋には門司城を攻めた。筑前の筑紫惟門も毛利氏の援助をうけ、筑前で挙兵した。この戦によって中世博多の町は炎上したのである。(註)

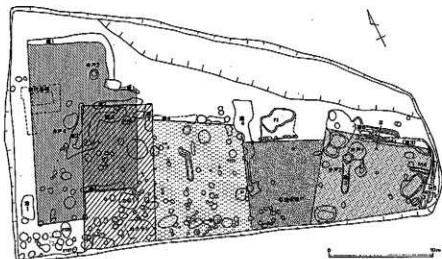
これが政治的な動きである。これに伴って経済的な動きが、おのずから出てくる。日鮮貿易で朝鮮の陶磁器がはいり、日明貿易による中国製の青磁がはいってくる。この貿易港が博多・



- I期(昭和期)20C
- II期(江戸期)17C~18C
- III期(中世)15C~16C

B地区

C=世紀略



- I次 江戸時代家から明治時代末の
- II次 100年間に5回ほど建てられ
- III次 ている。
- IV次
- V次

A地区(江戸時代～明治時代)

門司関・赤馬関から搬入するもので、大内氏領国内で出廻っていく。

金屋遺跡の場合、中国製磁器は14世紀代の竜泉窯がはいっている。15世紀代のものみられる。朝鮮の象嵌青磁や李朝の白磁等が検出された。また、山口県の周防系の足釜・茶釜・摺鉢類がみられる。

調査の最大の目的であった、鋳物大工の工房はあたらず、その一部と思われる鍛冶が2ヶ所検出した。茶釜や足釜の遺物がはいった土壇も見られ、それ以前の住居跡が3軒出土している。1軒には、北側にカマドをもっている。これらの住居跡の一部しか掘られず、大半は泉道の下にはいていたため、未掘りである。遺構の集中度からみると、核心部は泉道の中にあると判明した。

結論的には、遺構や遺物から、14世紀末から15世紀にかけての時期のもの大半は、大内氏の影響下におかれ、経済的なものが多く検出された。大内氏の統治の一端が考古学におさえることができたわけである。

註

註 拙稿の「Ⅱ、福岡県の中世山城の概観」【九州縦貫自動車道関保埋蔵文化財調査報告—XXIX—(福岡県中世山城跡)】1979 福岡県教育委員会

2. 検出遺構と遺物について

京都の金屋の鋳物大工として、文献で有名な^{おきや いもと}金屋鋳物師の本貫地の金屋が、行橋バイパスの路線内にあって、それを横切ることになったので、当初から調査が必要であると言われていた場所である。

発掘調査を実施してみると、15世紀前半の工房跡等のみならず、この位置ではないことが判明した。15世紀以前の住居跡3軒を道路端で捕捉したのと、15世紀前半の土壇等を検出した。生活に使用したであろう井戸（素掘・石組・桶・陶管・コンクリート製）は、順序よく調査を行なった。これに伴う溝や柱穴等をも共にである。

検出された遺構からは、中世の時期の遺構があつて、江戸後期以後との二つの面で分離できる。ただしこれは10cm前後の高低差の中で、しかも現在の家のための擾乱がはいっていたために、完全に分離することができなかった。これを遺跡の展開図として第64図に示めた。

遺跡の立地は標高3mの砂丘状にあるわけで井戸については、その井戸の汲み上げは一つの行幸とみることができる。そして井戸を廃棄する時には水神上げの祭祀を、行なっているものが見られる。海に近かったので良水であったかどうかは知る由もないが、毎年一回は汲み上げたもので

あろう。第65図はこの様にして渡えたことが考えられる。

遺構の状態から見ると、現状の県道の下がもっとも良好な場所である。残念ながら平面交差であるために調査はできなかったが、今後道路維持工事の折には注意することが必要となる。

このことを踏まえながら金屋の鋳物大工について、福岡県百科事典（註1）によると、次の様に記述されている。

京都金屋鋳物師（今井鋳物師）

【豊前国仲津郡金屋村および今井村（現行橋市大字金屋および大字今井）を本貫とし15世紀前半北九州・山口を中心に活動した藤原姓の鋳物師。昌久・安氏・頼安・吉安等の鋳工名が銘文により知られる。遺品はわずかに行橋市今元浄喜寺梵鐘と津屋崎町の縫殿神社の梵鐘の2例を数えるだけだが文献に記されたものを含むと応永21年（1414）周防国古田郷熊野宮鐘を皮切りに、宝徳元年（1449）豊前国犀川村（現築上郡犀川町）葺持権現社鐳口まで30数年間の事跡をたどることができる。その後の足跡は遺品によって確認することはできないが、伝承によれば天正・慶長のころまでこの地に鋳工があり、後に小倉鋳物師町に移住して世々11代にわたって中野孫兵衛を名乗り鋳物師業を営んでいたという。梵鐘に見られる製作上の特徴は、駒の爪が2段になっていること、竜頭の竜口が笠形上から出た円柱を噛んでいるような形になり、その上唇が舌状に前に垂れ下がることなどが特徴である】という。

縫殿神社の梵鐘は総高80.5cm、鐘身高59cm、口径47cmで県指定文化財である。永享12年（1440）在銘の小型の和鐘で、銘文の中に「豊前州今井庄東金屋大工藤原吉安」の名が陰刻されている。また本貫地の浄喜寺には応永28年（1421）在銘の大型和鐘がある。この梵鐘には「鋳物師大工豊前国今居住 左衛門尉藤原安氏作」と刻銘されている。この鐘はそもそも彦山靈山寺の梵鐘がどの様な経路で本貫地の浄喜寺にはいったかは定かではないが、鐘の総高158cm、鐘身高113cm、口径89.5cmである（註2）。

当該遺跡からは鍛冶炉と思われるもの2ヶ所と真土と思われる火を受けて固まっている粘土と、とり瓶と思われる鉄製品等が見られた。15世紀前後の遺物としては、貿易陶磁器類や周防系の足釜・スリ鉢（註3）や茶釜・土鍋等と宋銭と明銭の永楽通宝等が検出したことによるが、



第65図 井戸替図

15世紀前半の頃の、所産遺物がほぼセットとして把握できた。

しかしながら、工房跡を捕捉することができなかったことは残念である。豊前国と筑前国との土器から見ると若干相違することがいえるが今回は中世の14世紀末から15世紀前半の遺物が検出されたことに意義をもつもので、住居跡3軒については、それより以前のものとして捕えることとする(註4)。

立地条件から見ると当該地より東の春日神社位置が、いわゆる東金屋で称される場所で、この付近が、鋳物大工の工房跡の可能性が考えられる。

前述した様に、鋳物大工達が慶長年間以後、小倉城下に集められたことによって、完全に海辺に近い農村となるわけである。順々に干拓が進み耕地化されていくわけである。春日神社の勧進は承和元年(1375)という(註5)。この周辺が鋳物大工の集落であると推定される。

大内氏は芦屋釜で有名な、芦屋鋳物師集団も翼下に入れているわけで、この集団の最盛期と金屋鋳物師集団とが並列しているわけである(註6)。東の今井鋳物師は畝川の河口に、西の芦屋鋳物師達は遠賀川河口で、うでをふるったわけで、大内氏の没落と京都の新興鋳物氏・三条釜座の急速な成長などによって衰退したもので、芦屋の鋳物師は、筑前博多に集められた。今井の鋳物師は、豊前小倉に集められ、小倉鋳物師として、細々と生き続ける、旧鞍手郡内の半鐘等に小倉鋳物師の名が刻まれている(註7)。

これら鋳物師の系譜はあまり良く調査されていない。今後の分野である。

註

註1 『福岡県百科事典』 西日本新聞社版 1982

註2 福岡県教育委員会『福岡県の美術工芸品1』福岡県教育委員会 1981

註3 豊前の周防灘沿岸の中世の雑器については、谷口俊治「豊前地域の中世雑器——山陽道西部地域の設定に向けて——」『研究紀要』第3号 1989。足釜の分類については岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古』第17号 山口考古学会1988。その他に「中近世土器の基礎研究」IV・VI・VII 日本中世土器研究会が精力的に動いている。

註4 乗安和二三「山口県における発掘調査状況(歴史時代)——中世土器の編年に関する現状と課題」第2回防長土器研究会1988。福岡市教育委員会が刊行している報告書「博多」のもの、貿易陶磁器から年代位置付としている。

註5 『福岡県』『角川日本地名大辞典』の金屋による。1988

註6 西村強三「近世博多の鋳物師太田・山鹿家(一)」九州歴史資料館研究論集12 1987

西村強三「芦屋釜・芦屋の金工」『芦屋釜展』1991 芦屋町教育委員会

有川宜博「芦屋釜の時代」『芦屋釜展』1991 芦屋教育委員会

坪井良平「日本の梵鐘」

註7 北九州市立歴史博物館での有川氏を中心に「小倉鋳物師の研究」が行なわれている

※ 浄喜寺の梵鐘や鋳物師のことについては、九州歴史資料館松岡史参事から教示を受けた。

参考

浄喜寺の梵鐘は県指定有形文化財（工芸）で昭和41年10月1日指定されている。

その指定調査によると

品質・形状： 鋳銅 青銅製有銘（陰刻）
龍頭 方向は鐘座二つを結ぶ線に同じ
乳 五段五列

時代： 室町時代

法量： 総高 1610cm 龍頭高 39cm 笠形高 70cm
鐘身高 115cm 口径 894cm 口辺厚 112cm

銘文： 池の間 1区
彦山靈山寺
大講堂洪鐘一口
座主惣衆合力諸人助成

池の間 2区
大観進富山住
権律師珍海勝光房
助成富国今居住沙弥道本

池の間 3区
右志者為天下泰平国土豊饒
山上安穩興隆佛法十方
且那息災延命而已

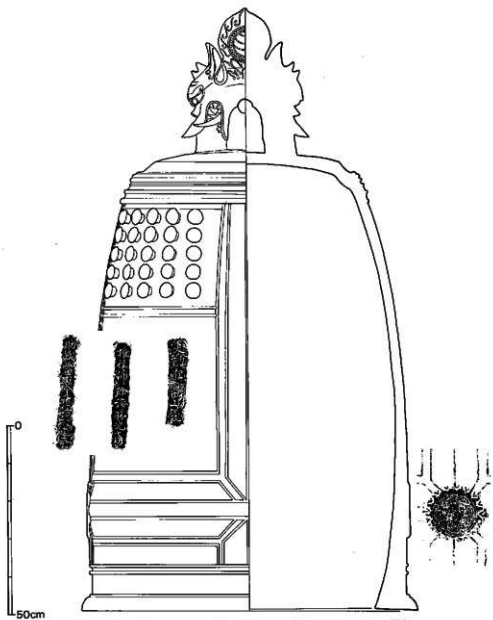
池の間 4区

由来： 応永廿八年辛丑六月廿七日
鋳物師大工豊前国今居住（傍点筆者）
左衛門尉藤原安氏咋料助成
当初は彦山靈山寺に奉納されていたが、明治維新となり、神仏分離命によって、英彦山は神社として存続することになった。この鐘はその銘文の通り、ゆかりの地・浄喜寺の所管となって今日に及ぶ。

音響： 清く潤亮である。

損傷： 鐘座は相当に使用されているが、損傷はない。

金屋の鋳物師達がつくった鐘が今井の浄喜寺にあることは、鋳物師達の魂のさけびでもある。毎朝、毎夕になる鐘は周辺の集落に響いている。



行橋市淨喜寺鐘銘

(第一区)

彦山靈山寺

大講堂洪鐘一口

座主惣兼合力謹入助成

(第二区)

大勸進当山住

權律師珍海勝光房

助成当国今居住沙弥道本

(第三区)

石志者爲天下泰平国土豊饒

山上安穩興隆佛法十万

且那息災延命而已

(第四区)

応永廿八年六月廿七日

鈍物師大工豊前国今庄住

左衛門尉藤原安氏作料助成

第66図 淨喜寺 梵鐘実測図(1/10)(松岡史氏原図改変)

3. 総括

今回の発掘調査の成果を箇条書にして総括してみたい。

1. 金屋遺跡は標高3m前後の海岸砂丘状の堤防上にあつて、中世期には畝川の河口と海が接する場所が今井の市で、その西横に当該地がある。
2. 当該遺跡は、中世から現代まで遺構が断続的につづいているもので、住居を伴う生活遺構（井戸・柱穴群・カマド等）である。
3. 中世期の鋳物師大工の工房集落を捕捉するために調査を実施したが、その端部を捕えたが、核心の部分にいたらなかった。
4. 中世期の遺物には15世紀を中心とする山口県周防・長門の影響を受け、貿易陶磁類（中国製・朝鮮製）もあつて、その当時の交易の一端を知ることができた。
5. 政治・経済的にも、周防・長門の守護大名であつた大内氏の統治下であり、それに伴う遺物等が多数流入していたことが実証された。
6. 発掘調査の結果、遺構の中心部は県道下にあることが判明し、今後、県道の維持工事の折には注意が必要である。

以上が、金屋遺跡のまとめである。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝しつつ、筆を擱く。(H3, 2)

金屋遺跡の野帳より二句

夏風の香に

顔も織も

勇立ち (久仁) 1990. 5.

水無月の

雨と競うか

尚武花 (久仁) 1990. 6.

圖 版



金屋遺跡周辺 俯瞰航空写真(蔵川上空から海を見る) 建設省提供



金屋遺跡付近 航空写真(南から) 建設省提供



金屋遺跡 発掘区全景俯瞰(北から)

(1) 金屋遺跡
発掘調査前(南から)

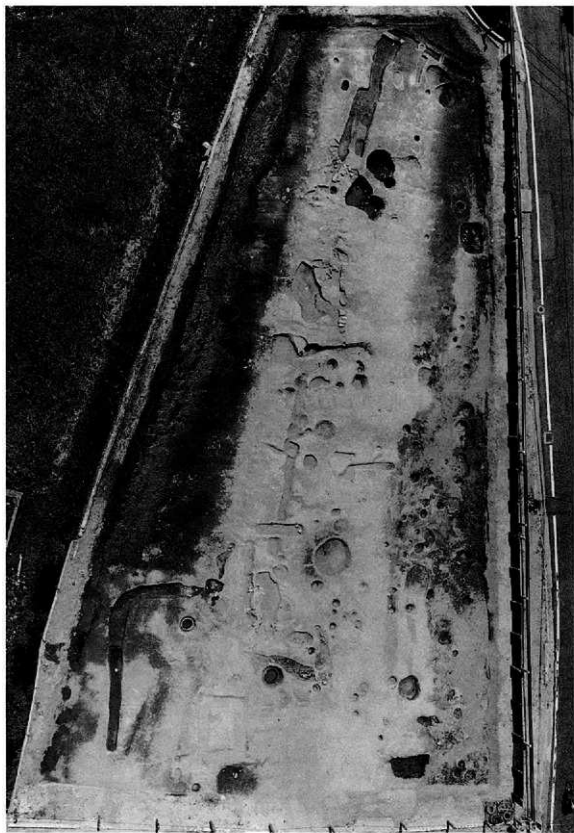


(2) 金屋遺跡
表土剥ぎ



(3) 金屋遺跡
発掘風景





金屋遺跡 Ⅰ-A区 遺構全景(空中写真)(西から)



(1) I-A区 全景(北から)



(2) I-A区 全景(西から)



(1) I-A区 建物遺構近景(北から)



(2) I-A区 建物遺構近景

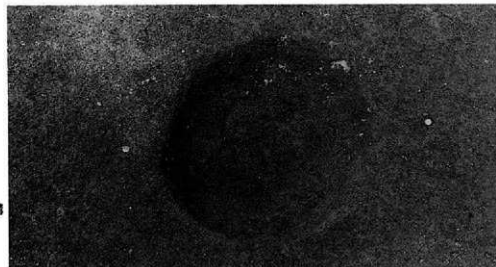
(1) I-A区 胞衣遺構
全景



(2) I-A区 胞衣遺構
蓋をはずした土瓶



(3) I-A区 胞衣遺構
(取り上げ後)





(1) I-A区 井戸遺構 近景(茶掘・陶管井戸)



(2) I-A区 建物 4号の雨落ち線



(1) I-A区 建物1号▶
の溝状遺構

(2) I-A区 近代土坑





金屋遺跡 I-B区 遺構全景(空中写真)



(1) I-B区 全景(先の家の前面がC区)



(2) I-B区 近景(東から)

(1) 1-B区 住居跡
群(西から)



(2) 1号住居跡
全景

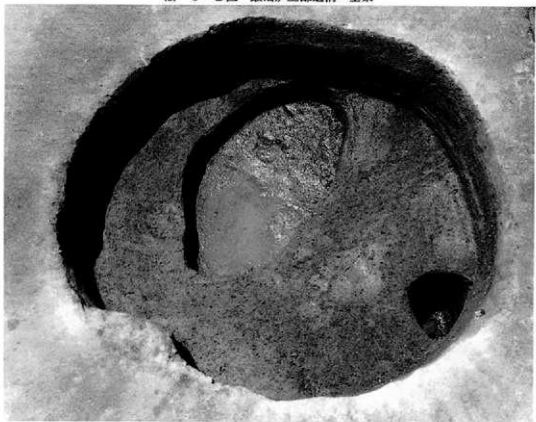


(3) 2号・13号住居
跡全景





(1) I-B区 鍛冶炉上部遺構 全景



(2) I-B区 鍛冶炉下部遺構 全景



(1) I-B区 土坑墓群 全景
(2) I-B区 土坑墓群 近景

(3) I-B区 2·3土坑墓 近景
(4) I-B区 2·3土坑墓全洞 近景



(1) I-B区 中世土坑 全景



(2) I-B区 中世土坑 4 Pic100 遗物出土状况



(3) I-B区 中世土坑 2 近景



(4) I-B区 中世土坑 3 近景



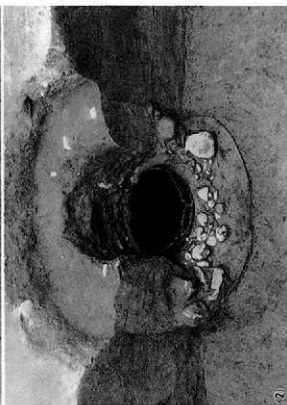
(1) I-B区 Pt46 遺物出土状況
(2) I-B区 遺物出土状況



(3) I-B区 中世土塚 茶釜1 出土状況
(4) I-B区 中世土塚 茶釜1 近景



(1)

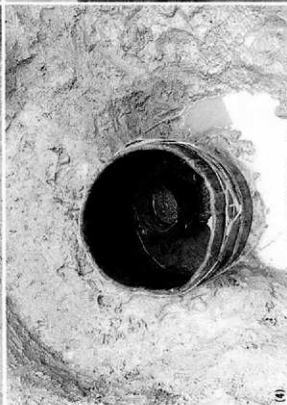


(2)

(1) I-B区 井戸5号(桶井戸) 全盛
断面上部
(2) I-B区 井戸5号(桶井戸)



(3)



(4)

(3) I-B区 井戸5号(桶井戸) 断面下部
(4) I-B区 井戸5号(桶井戸) 最下部状態



金屋遺跡 I-C区 全景(東から)



金屋遺跡 II区 全景(上から)

(1) II区 近景(東から)



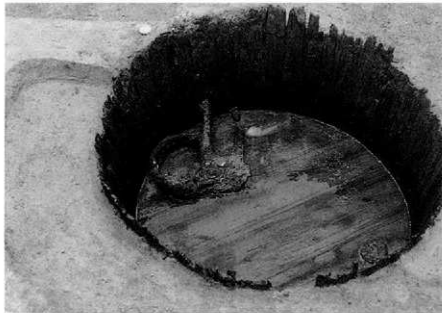
(2) II区 近世建物
遺構 近景
(西から)



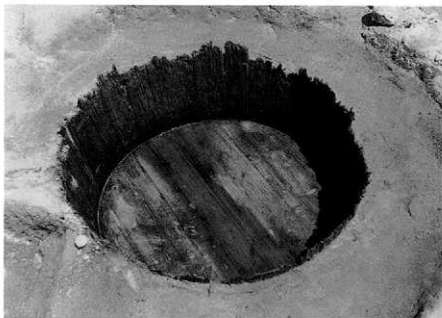
(3) II区 西端の近世
遺構 近景
(北から)



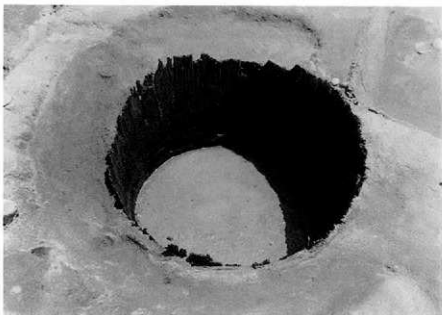
(1) II区 桶2遺構
全景



(2) II区 桶2遺構
遺物を取り上げ後状況

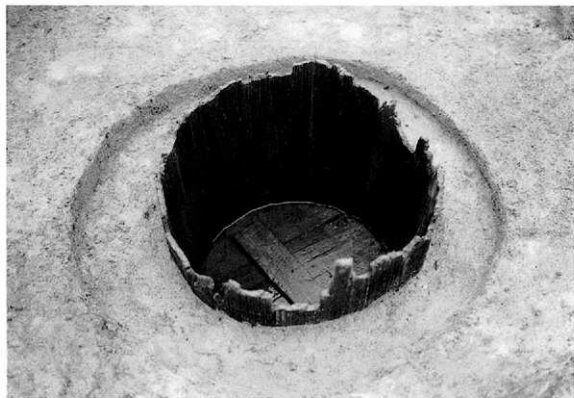


(3) II区 桶2遺構
桶底を取り上げ後状況





(1) II区 桶1遺構 全景



(2) II区 桶1遺構 近景(遺物取り上げ後)



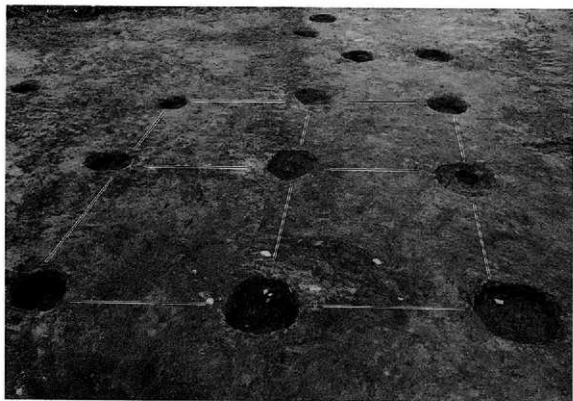
(1) II区 井戸2号(陶管井戸) 全景



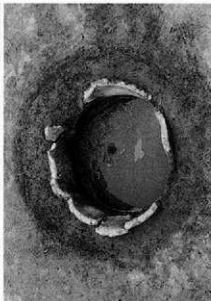
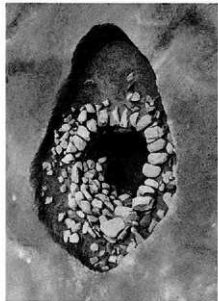
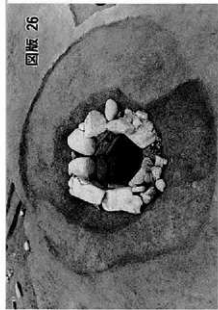
(2) II区 井戸2号(陶管井戸) 断面

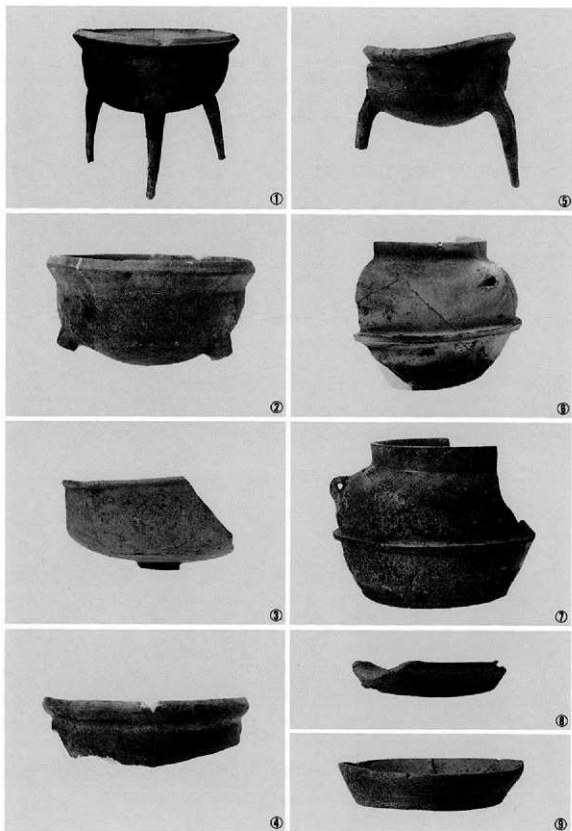


(1) II区 南西建物遺構 全景(東から)

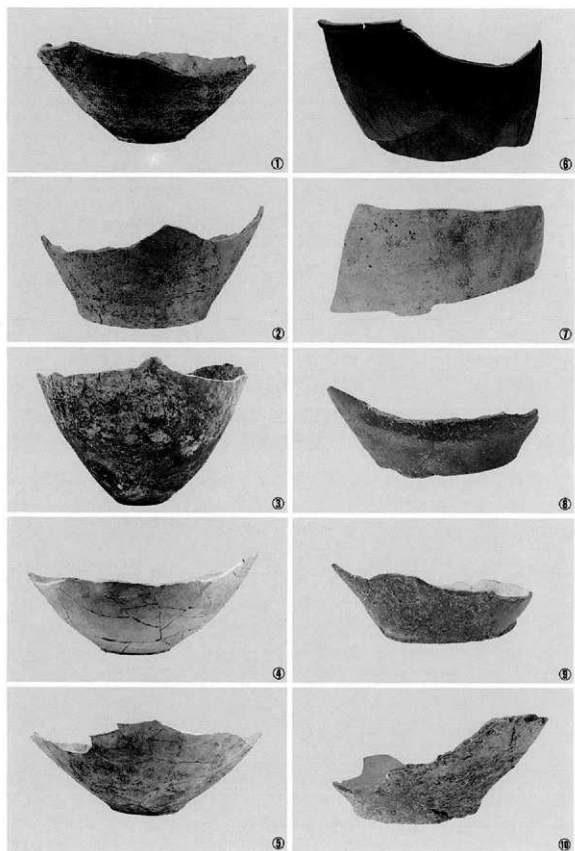


(2) II区 南西建物遺構 近景(東から)

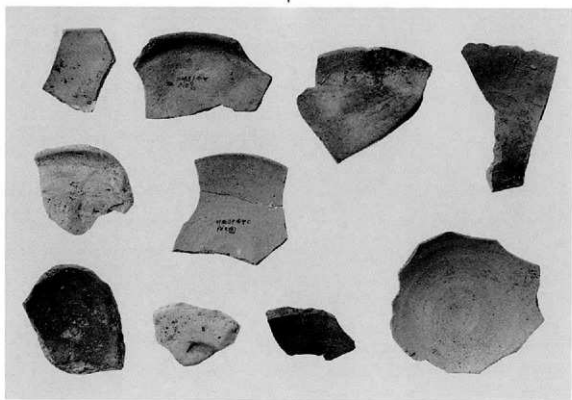
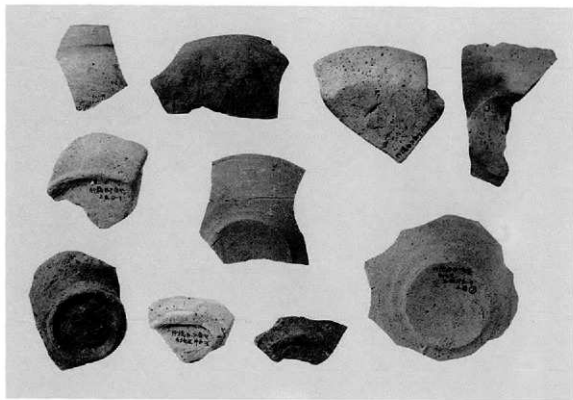




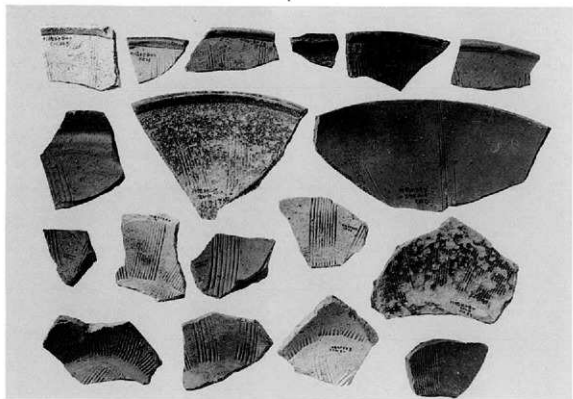
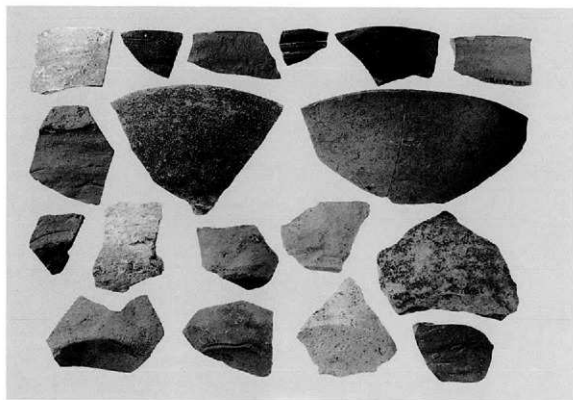
金屋遺跡 出土遺物 ① (足釜・茶釜他)中世



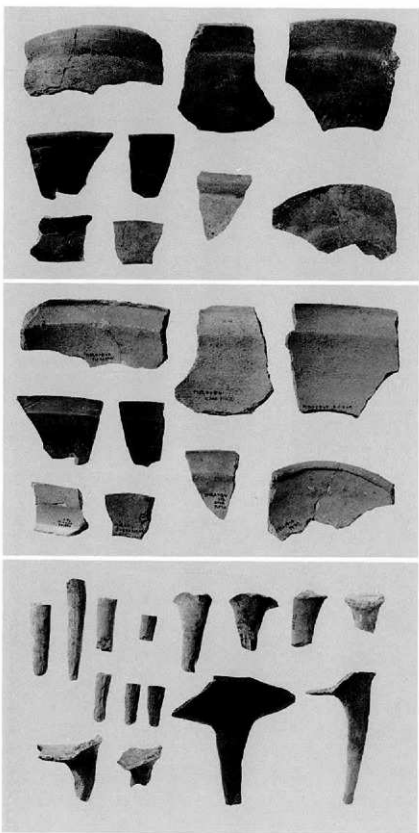
金屋遺跡 出土遺物 ② (甕・火鉢)



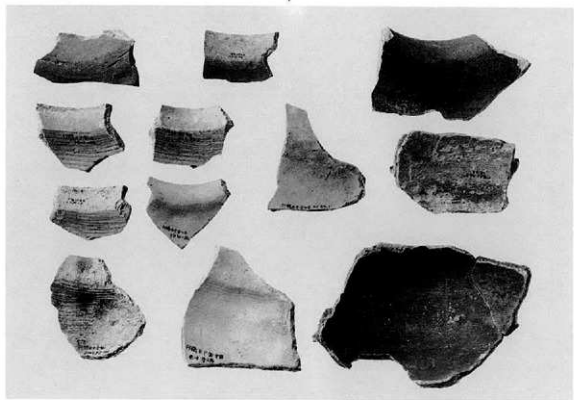
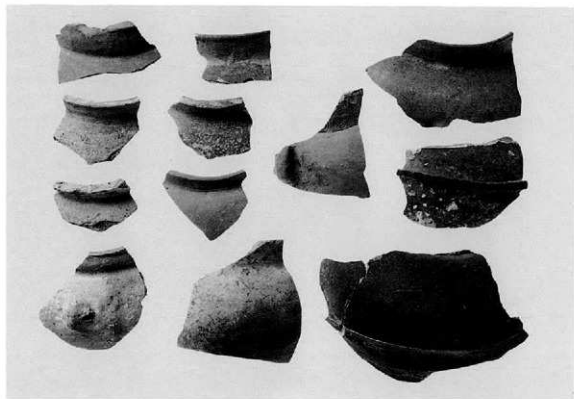
金屋遺跡 出土遺物 ③



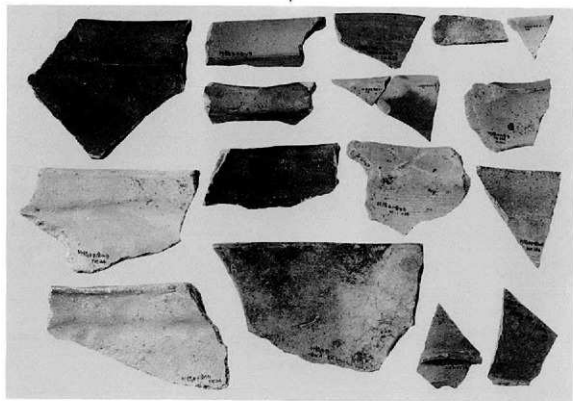
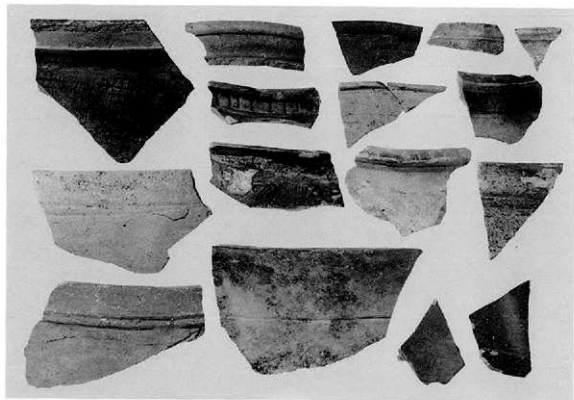
金屋遺跡 出土遺物 ④ (スリ鉢)



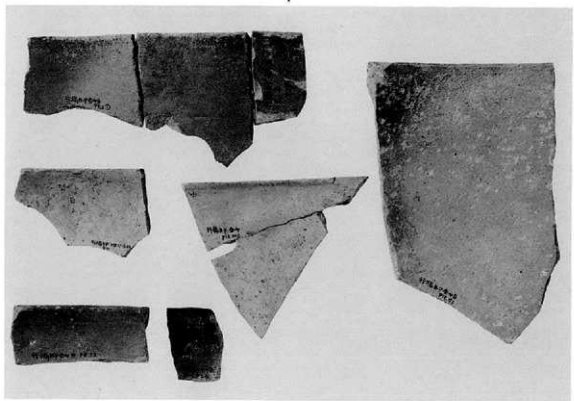
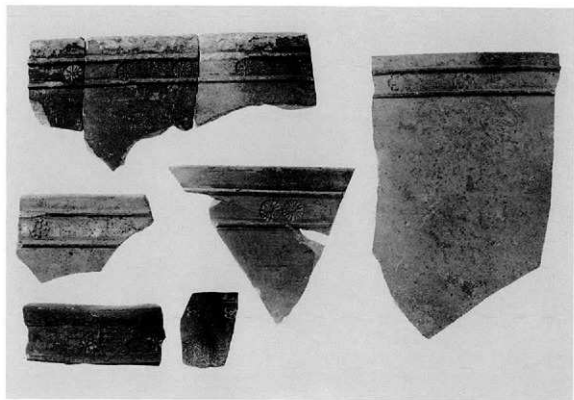
金屋遺跡 出土遺物 ⑤ (土鍋・足釜)中世



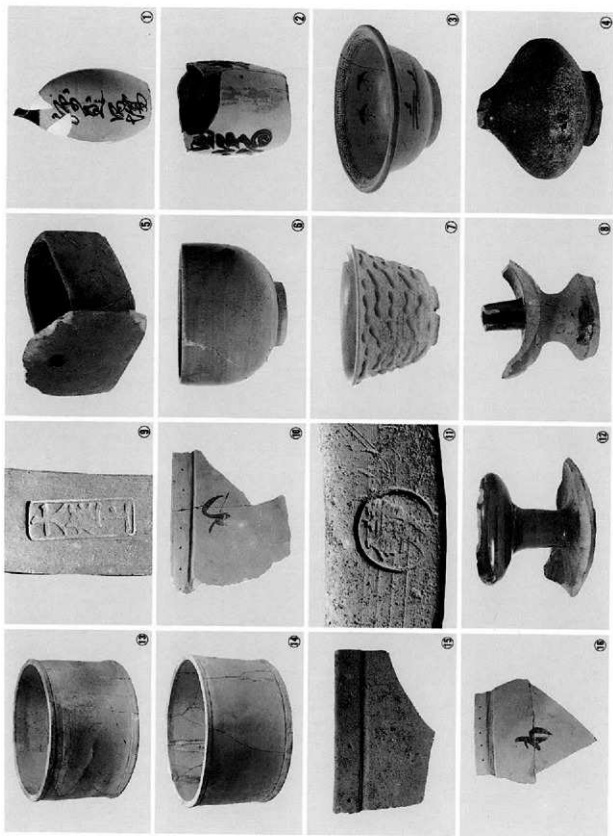
金屋遺跡 出土遺物 ⑥ (茶釜)中世



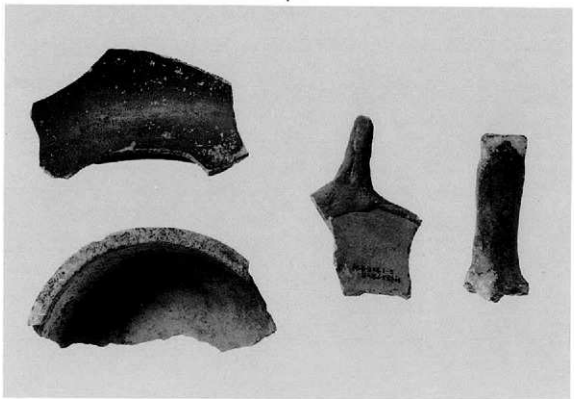
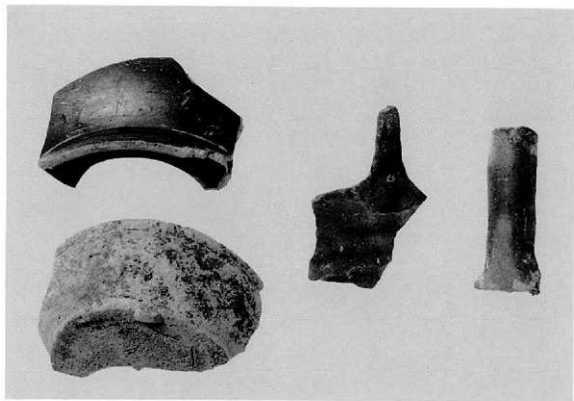
金屋遺跡 出土遺物 ⑦ (火鉢)



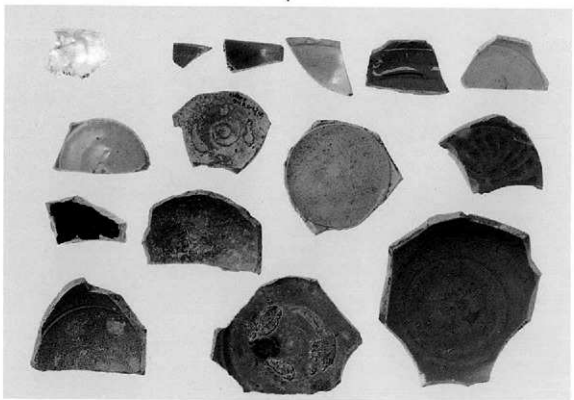
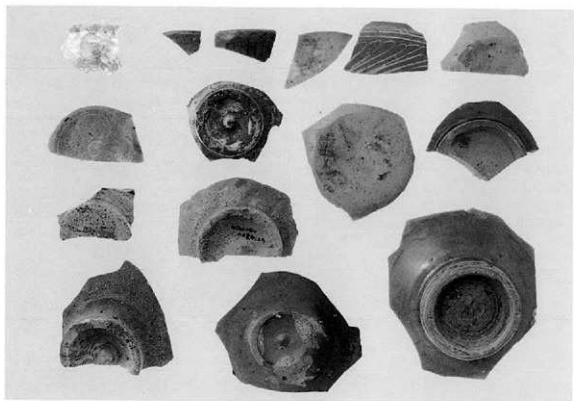
金屋遺跡 出土遺物 ③ (火鉢)中世



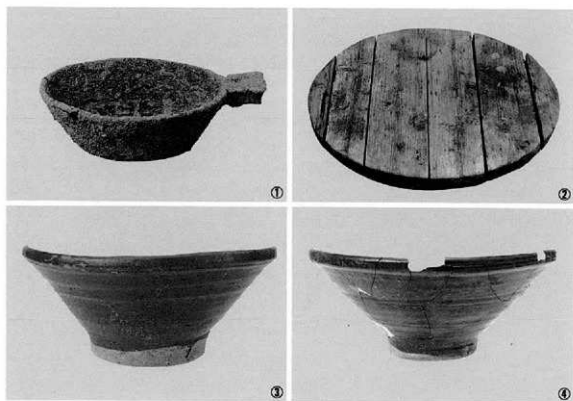
金屋遺跡出土遺物 ⑧ (井戸枠他)近世



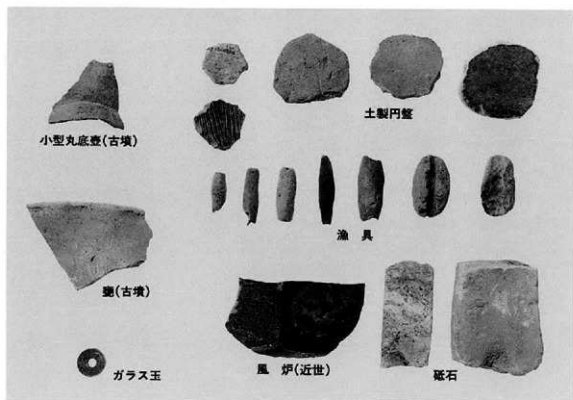
金屬遺跡 出土遺物 ⑩ (土鍋・焙烙把手)



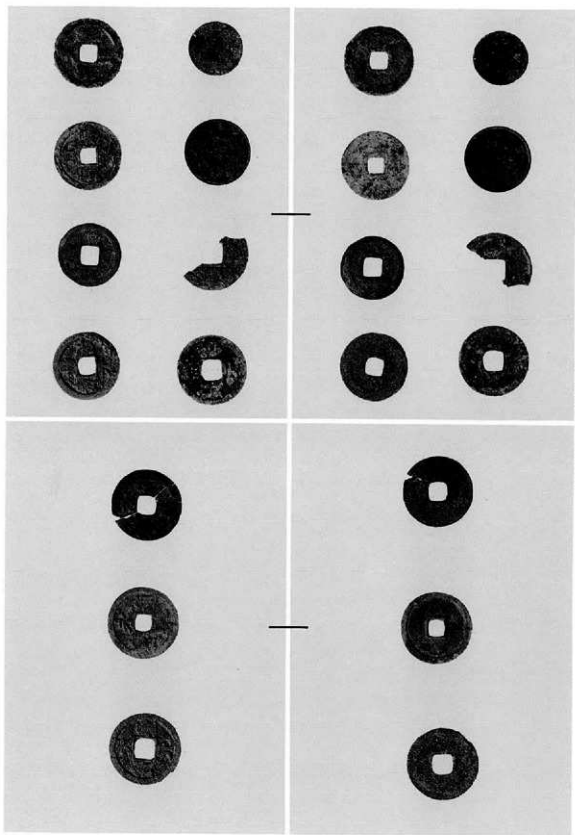
金屋遺跡 出土遺物 ① (貿易陶磁器・ガラス)



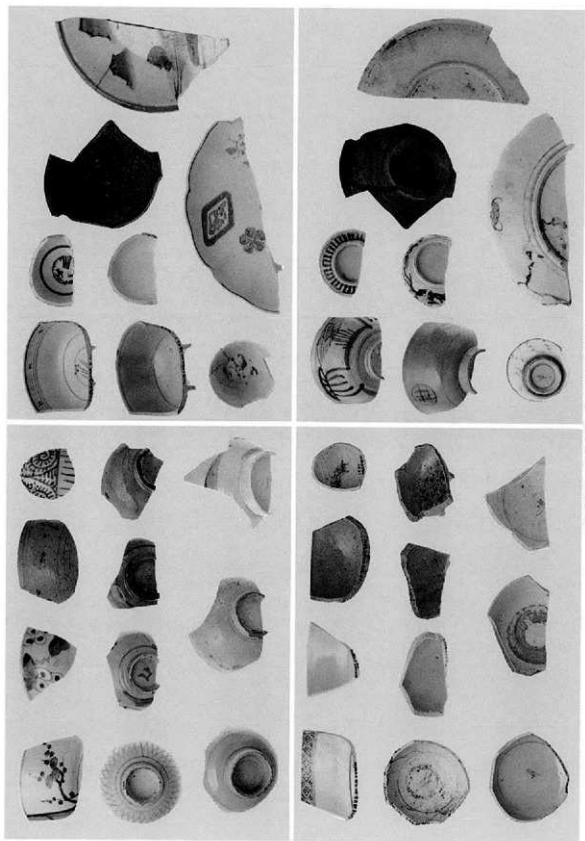
1. とり瓶 2. 桶底板 3.4. 近世スリ鉢



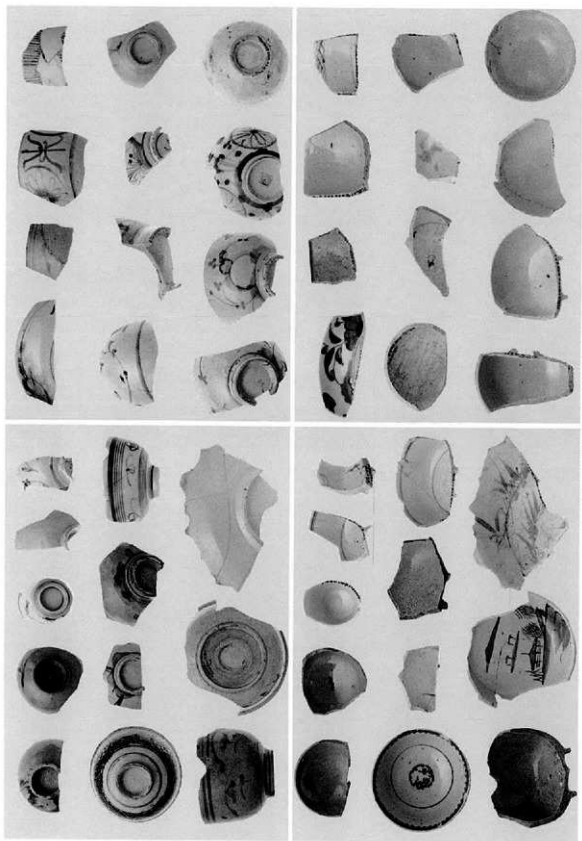
金屋遺跡 出土遺物 ⑫ (とり瓶・桶底板・土製円盤・砥石他)



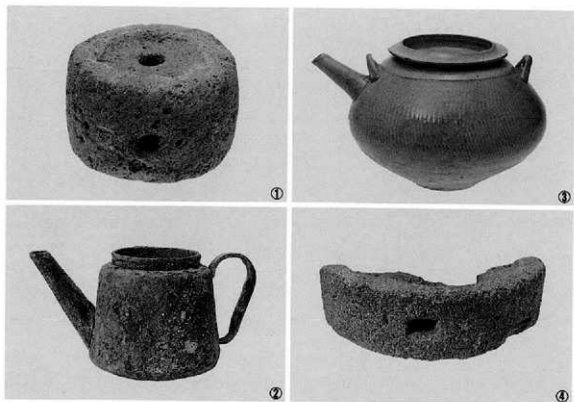
金屋遺跡 出土遺物 ⑬



金屋遺跡 出土遺物 ⑧ (近世陶磁器)



金屋遺跡 出土遺物 ⑤ (近世陶磁器)



①・④石白 ②真鍮製水注 ③陶製土瓶(胞衣壺)



金屋遺跡 出土遺物 ⑮ 近代遺物

行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

金 屋 遺 跡

1992年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区松田1丁目9-30
電話 (092) 611-3838

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 3	登録番号 4

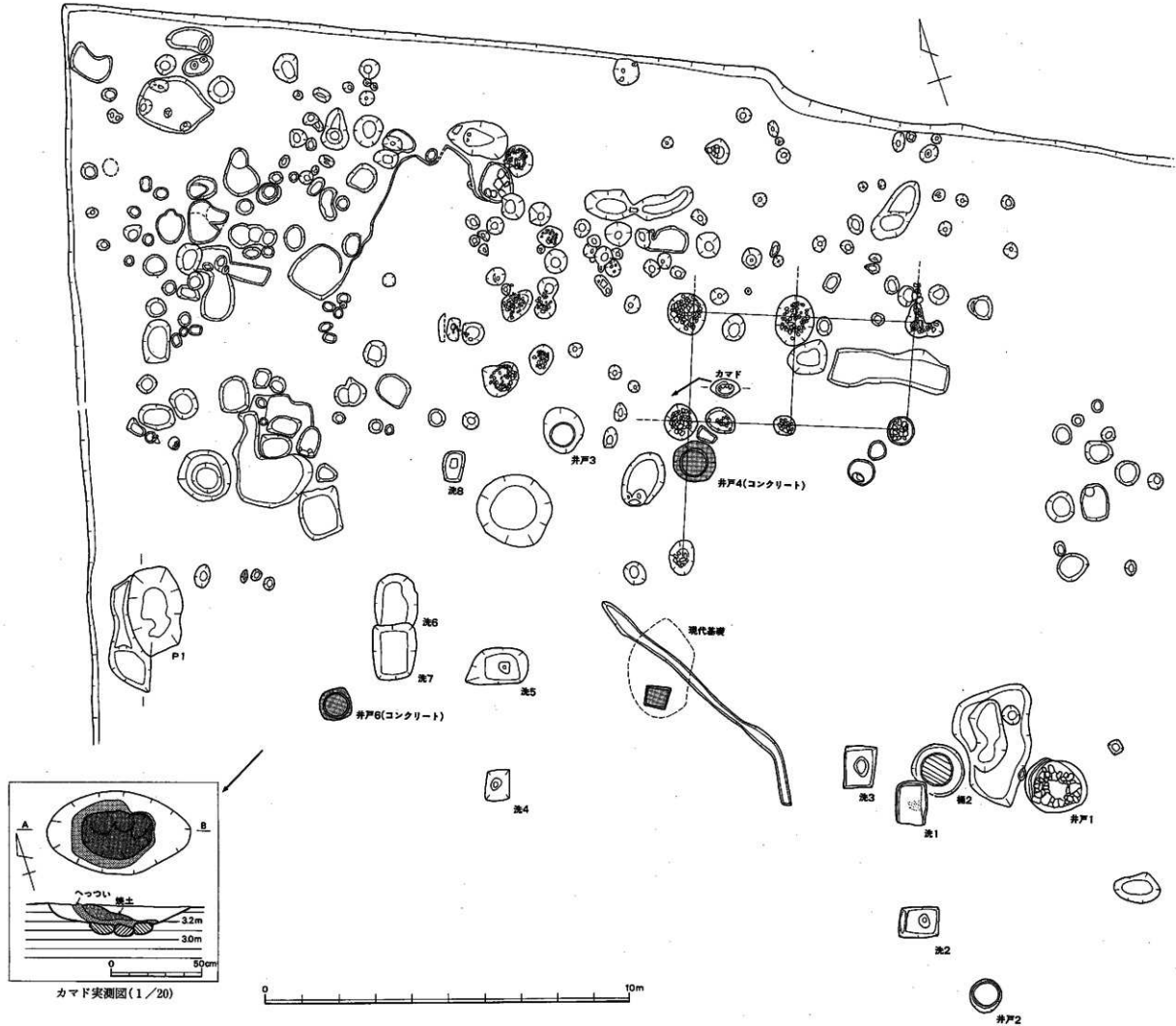
一般国道
10号線 行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

金屋遺跡

福岡県行橋市大字金屋所在遺跡の調査

付 図

付図1 金屋遺跡2区建物配置図(1/100)



付図1. 金屋遺跡2区建物配置図(1/100)